特219
437

蕪村俳句全集

始

特219
437

半田良平編

季題別
年代附

蕪村俳句全集

東京 素人社書屋版

昭和一〇・一一・二四
帝國圖書

序

「季題別・年代附・芭蕉俳句全集」「季題別・年代考・一茶俳句集」を出版した順序として、この書を編纂しようと思ひ立つたのは、特に理由のある譯でない。世間でも、芭蕉、蕪村、一茶の三人は常に並稱して、人によつては、三大俳聖とまで言つて居るものもある位だから、この三人の句集を同じ體裁で出しておくことは、私としても、當然爲すべき義務のやうな感じがしたからである。しかし、かういふものを編纂するには、なるべく屋上屋を架する愚は避けて、そこに何等かの特色を出さればならぬことは、苟も編纂にたづさはるものの、常に心掛ければならぬ所である。その意味で、この書には、例言にも書いてある通り、從來のものとは聊か異なつた特色をもたせた積りである。この書を機緣として、芭蕉のそれとも異なり、また一茶のそれとも異なつたところの、蕪村の俳句の風格に親しむものが一人でも多く出れば、私の望みは滿たされた譯である。

半田良平

例言

一、谷口(後、與謝と改む)蕪村の句集が、初めて世に出たのは、蕪村歿後の翌年、即ち天明四年に門人の几董が編纂した「蕪村句集」を以て嚆矢とする。この書は、後の表でも明かな通り、彼の作八百六十八句を收めて居るが、全體の作句數に比べると、約半數にも足らぬのみならず蕪村の佳句秀什を逸した憾みがある。

一、次で、今は故人となつた大野洒竹氏が、俳諧文庫の一篇として「蕪村曉臺全集」を編纂した折、先の「蕪村句集」に洩れた句を、諸俳書及び短冊から拾ひ集めて編纂したものを、洒竹氏は假に「蕪村句集後篇」と名づけて、同書中に收めて居るが、これには約六百句程載つて居て、次に逃ぶる「蕪村遺稿」と重複した分を除けば、全體で四百六十三句になる。この編纂は明治三十一年の交で、今から思ふと、洒竹氏の努力の並大抵でなかつたことが察せられる。

一、然るに、明治三十三年の春、京都で催された蕪村遺墨展覽會で、偶々「蕪村遺稿」と題する寫本が發見されたが、これは蕪村研究の文獻的資料として、特に重大視すべき發見であつた。その際、今は古人となつた水落露石氏が、他書を參考し、新に逸句を集め、高安月郊氏の簡單な跋文を附して木版本の體裁で出版したものが、世に謂ふ「蕪村遺稿」であるが、現在では絶版になつて殆んど手に入れることが不可能である。この書には五百六十六句收めてある。因みに寫本の「蕪村遺稿」は、三史堂出版、獻可堂手記となつて

居るが、もと何によつたものか分らぬそうである。

一、以上の三書、即ち「蕪村句集」「蕪村遺稿」「蕪村句集後篇」は、このやうに異なつた由來かもつた書であるが(尤も後二者には重複した句が收めてある)、今、これらに載つて居る俳句全部に、蕪村の隨筆「新花摘」其他に散在して居る六十句程を加へる時は、こゝに蕪村俳句全集が完成する譯である。私が、本書を季題別に編纂しながら、各句の載つて居る原本を一々明記しておいたのも、原本の成立を尊重したからのことである。この點に、この書の特色が存して居る。

一、本書の各句の下に(句集)、若しくは行間に「右三句、句集」などと記したのは、以上の心遣ひからで、「句集」は「蕪村句集」、「遺稿」は「蕪村遺稿」、「後篇」は「蕪村句集後篇」のそれ〴〵の略號である。

一、次頁に掲げた表は、各原本の所載句數と、蕪村の作句數とを見る上に、何等かの參考になるのであらうと信ずる。

目次

新年之部

時候

歳旦……九　蓬萊……九
初日……九　雑煮……九
書初……九
七草……九

人事

門松……九　福壽草……九

植物

春之部

時候

餘寒……九　春の夜……一〇
遅日……九　朧夜……一〇
春の夕……一〇　花曇……一〇
春の暮……一〇
宵の春……一〇　春暮……一一
行春……一一

春惜む……一一
彌生盡……一一

天文

霞……一一
東風……一三
春風……一三
陽炎……一三
春雨……一三
春の月……一三
朧月……一三

地理

雪解……一三
焼野……一三
水温む……一四
春の水……一四
春の海……一四
苗代……一四

燈寒ぎ……一四
出代……一四
蔵入……一四
初午……一五
御忌詣……一五
壬生念佛……一五
彼岸……一五
畑打……一五
種俵……一五
種おろし……一六
接木……一六
凧……一六
雛祭……一六
茶摘……一六
海苔取……一六
花見……一六
櫻狩……一六
花守……一六

人事

原本所載句數表

書名＼季	新年	春	夏	秋	冬	合計
蕪村句集	四	二三〇	二三三	二一七	一九四	八六八
蕪村遺稿	一	一四六	一〇三	一七四	一四一	五六六
蕪村句集後篇	三	八〇	一九六	八七	九六	四六二
其他	一	一七	一〇	一七	二一	六五
合計	八	四六三	五四三	四九五	四五二	一九六一

季題別句數表

	新年	春	夏	秋	冬	合計
時候	二	五七	四四	六八	三六	二〇七
天文	一	五七	五一	一〇七	一二五	三三〇
地理	一	二七	一八	五	二三	七三
人事	五	六二	一八三	一九	一六四	五三三
動物	一	八五	八五	五一	五三	二七四
植物	一	一七五	一六〇	一三四	六一	五三一
雜	一	一	二	一	一	一三
合計	八	四六三	五四三	四九五	四五二	一九六一

花衣……一六

動物

鶯……一七
鶏雁……一七
燕……一八
雲雀……一八
親雀……一八
雉子……一八
若鮎……一八
蛙……一八
田螺……一九
蝶……一九
蜂……一九
蜃……一九

植物

梅……一九
紅梅……二一
柳……二一
蕗の薹……二一
芹……二一
蓬……二一
菫……二一
菜の花……二一
椿……二一
桃……二一
梨の花……二一
海棠……二一
初櫻……二一
糸櫻……二一
一重櫻……二一
櫻……二一
山櫻……二一
遅梅……二一
花……二一
花さかり……二四
落花……二四
春の草……二五
三味線草……二五
蕨……二五
三月菜……二五
若和布……二五
蹴鞠……二五
山吹……二五
藤……二五

夏之部

時候

卯月……二六
短夜……二六
明易き……二七
麥秋……二七
暑さ……二七
涼……二七

天文

薫風……二八
涼風……二八
五月雨……二八
夕立……二九
雲の峯……二九
夏の月……二九
旱……二九
草いきれ……二九

地理

夏山……二九
夏野……二九
夏川……三〇
清水……三〇

人事

更衣……三〇
袷……三一
濯佛……三一
節句……三一

鞦……三一
粽……三一
麥刈……三一
田植……三一
早乙女……三一
田草取……三一
葵祭……三一
練供養……三一
祇園會……三一
水の粉……三五
施米……三五
葛水……三五
夏神樂……三五
心太……三五
御祓……三五
鮓……三五
蚊帳……三五
眞菰刈……三五
蚊遣……三五
麻刈……三五
竹婿人……三五
川狩……三五
抱籠……三五
鵜飼……三六
簟……三六
照射……三六
川床……三六
火串……三六
矢數……三六
雨乞……三六
風鈴……三四
晝寢……三四
掛香……三四
千……三四
夏書……三四
扇……三四
團扇……三四
甘酒……三四
一夜酒……三五
水の粉……三五
葛……三五
心太……三五
鮓……三五
眞菰刈……三五
麻刈……三五
川狩……三五
鵜飼……三六
照射……三六
火串……三六
乞……三六
納涼……三六

動物

時鳥……三六
閑古鳥……三七
水鶏……三八
初鰹……三八
鮎……三八
蝙蝠……三八
蟾……三八
蝸牛……三八
蟬……三九
羽蟻……三九
螢……三九
蝿……三九
蚊……三九
毛虫……三九
子……三九

植物

葉櫻……三九
實櫻……三九
若葉……四〇
若楓……四〇
筍……四〇
若竹……四一
夏木立……四一
木下闇……四一
早苗……四一
穂麥……四一
卯の花……四一
柿の花……四一
青梅……四一
杜若……四一
牡丹……四一
芍藥……四一
柚の花……四一
橘……四一
椎の花……四一
棕櫚……四一
楝……四一

玉巻芭蕉……四三
芥子の花……四三
一八……四三
合歓の花……四三
花茨……四三
蓼……四四
澤瀉……四四
河骨……四四
ぬなは……四四
百合……四四
山梔子……四四
壺菫……四四
夕顔……四四
瓜の花……四四
瓜……四四
藻の花……四四
浮草……四五
蓮……四五
釣しのぶ……四五
病葉……四五

雜

二句……四五

秋之部

時候

秋來る……四六
立秋……四六
初秋……四六
今朝の秋……四六
八朔……四六
十六夜……四六
秋の日……四六
秋寒……四六
身にしむ……四六
夜寒……四六
秋の夜……四七
夜長……四七
夜半の秋……四七
秋の暮……四七
暮の秋……四八
行秋……四八
秋惜しむ……四八
冬近し……四八
竹の春……四八
三日の月……五〇

天文

稲妻……四八
天の川……四八
野分……四八
秋風……四九
秋空……四九
露……四九
霧……五〇
初汐……五〇
名月……五〇
今日の月……五一
月……五一
後の月……五一
秋雨……五一
秋の霜……五一

地理

秋の山……五一
秋の野……五一
花野……五二
秋の水……五二
七夕……五三
魂祭……五三
燈籠……五三
つと入……五三
花火……五三
大文字……五三

人事

月見……五三
駒迎……五三
城南寺祭……五三
地藏會……五三
牛祭……五三
撫待……五三
待宵……五三
秋蚊帳……五三
秋扇……五三
虫賣……五三
角力……五三
蹈……五四
砧……五四
鳴子……五五
案山子……五五
毛見衆……五五
刈……五五
稲米……五六
新酒……五六
茸狩……五六
藥掘……五六
落し水……五六
崩れ築……五六
下り築……五六
鯊釣……五六
綿摘……五六

動物

鹿……五六
啄木鳥……五七
雁……五七
渡り鳥……五七
百舌鳥……五七
鳴……五七
鶉……五八
鴨……五八
雀……五八
河鹿……五八
鱸……五八
落鮎……五八
江鮭……五八
蜻蛉……五八
秋の蚊……五八
虫……五八
蟀……五八

植物

朝顔……五八
萩……五八
桔梗……五九
女郎花……五九
鶏頭……五九
蘭……五九
木槿……五九
木芙蓉……五九
芙蓉……五九
柿……五九
銀杏……五九
芭蕉……五九
菊……五九
野菊……六〇
芒……六〇
花芒……六〇
曼珠沙華……六〇
葛……六〇
蓼……六〇
荻……六一
蕎麥……六一
蘆……六一
椎……六一
栗……六一
唐黍……六一
煙草……六一
唐辛子……六一
鬼灯……六一
茸……六一
松蟲……六一
零餘子……六一
紅葉……六一
稲……六一

落穂……六二
種ふくべ……六二
散る柳……六三
破蓮……六三
梅もどき……六三

冬之部

時候

神無月……六四
小春……六四
初冬……六四
今朝の冬……六四
冬至……六四
夜半の冬……六四
寒夜……六四
霜夜……六四
寒さ……六四
冬されて……六五
師走……六五

天文

年の暮……六五
行年……六五
大年……六五
除夜……六五
初時雨……六五
時雨……六五
木枯……六七
冬の月……六七
寒月……六七
初霜……六七
霜……六七

雜

末枯……六三
十一句……六三
霙……六八
霰……六八
初雪……六八
雪……六八
吹雪……六八
年の雪……六九

地理

冬の山……六九
枯野……六九
冬川……七〇
氷……七〇

人事

冬籠……七〇
炉開……七一
炬燵……七一
火桶……七一
火理……七一
炭……七一
霜……七一
鉢叩……七二
寒念佛……七二
寒垢離……七二
寒摩……七四
御火焚……七四
顔見世……七四
口切……七四
納豆汁……七四
蕎麥湯……七四
喰……七四
薬……七四

河豚汁……七四
雪見……七五
節季候……七五
煤拂……七五
年木樵……七五
古暦……七五
節分……七五
寶舟……七五
年守……七五
年忘……七五
寒苦鳥……七七
鯨……七七
乾鮭……七七
海鼠……七七
杜父魚……七七

動物

狐火……七六
冬鶯……七六
鴨……七六
鴎……七六
鴛鴦……七六
水鳥……七六
千鳥……七六
都鳥……七七

植物

大根……七八
葱……七八
韮……七八
枇杷の花……七八
茶の花……七八
冬牡丹……七八
石蕗……七八
水仙……七八
寒菊……七八
歸り花……七八
冬の梅……七八
寒梅……七八
早梅……七九
冬至梅……七九
冬木立……七九
冬紅葉……七九
落葉……七九
木の葉……八〇
古葉……八〇
枯尾花……八〇
枯草……八〇

目次をはり

新年之部

時候

歲旦　歲旦をしたり顔なる俳諧師（後篇）
初日　日の光今朝や鰯のかしらより（句集）

人事

門松　歲旦辭
我門や松は二木（ふたき）を三の朝（後篇）
蓬萊　蓬萊の山まつりせむ老の春（句集）

雜煮　三椀の雜煮かゆるや長者ぶり（句集）
書初　大和の國なる何來の主が本卦の賀に
　　大和假名いの字を兒（ちご）の筆始（後篇）
七草　人日
　　七草や袴の紐の片むすび（句集）

植物

福壽草　朝日さす弓師が店や福壽草（遺稿）

春之部

時候

餘寒　池田から炭くれし春の寒さ哉（遺稿）
　　關の戸の火鉢ちひさき餘寒哉（後篇）
遲日　西山遲日

山鳥の尾をふむ春（お）の入日かな
遲き日や雉子の下り居る橋の上
懷舊
遲き日のつもりて遠き昔かな
（右三句、句集）

遅き日や餅開ゆる京のすみ
遅き日や草を草切る大手前

暮れかぬる日や山鳥のおとしざし
折りもてる蕨凋れてくれ遅し
（右四句、遺稿）

春の夕

遅き日や都の春を出て戻る
閉帳の錦垂れたり春の夕
一本、開帳の
春の夕たえなむとする香をつぐ
（右二句、句集）

宵の春

等閑に香炷く春の夕かな
春の夕かの絹羽織きたりけり
（右二句、遺稿）
燭の火を燭にうつすや春の夕
凡童とわきの濱にあそびし時
筋違にふとん敷きたり宵の春
肘白き僧のかり寢や宵の春
折釘に烏帽子かけたり春の宵
一本、春の宿
公達に狐化けたり宵の春
（右四句、句集）

春の夜

春の夜に尊き御所を守る身かな
もろこしの詩客は千金の宵を惜み
我朝の歌人は紫の曙を賞す
春の夜や宵あけぼのの其中に
（右二句、句集）
春の夜や狐の誘ふ上童（遺稿）
春の夜や盥を捨る町はづれ（後篇）

朧夜

朧夜や人そめる梨の園（後篇）

花曇り

花ぐもり朧に近き夕べかな（後篇）
にほひある衣も疊まず春の暮

春の暮

誰がために低き枕ぞ春の暮
轉寢のさむれば春の日暮れたり
（右三句、句集）
日くれ〳〵春や昔のおもひかな
うかぶ瀾に沓ならべけり春の暮
大門のおもき扉や春の暮
据風呂に棒の師匠や春の暮
あち向きに寢た人ゆかし春の暮
山彦の南はいづこ春の暮

暮春

春の暮筑紫の人と別れけり
（右七句、遺稿）
ある人に句を乞はれて
返歌なき宵女房よ暮の春（句集）
いとはるる身を恨み寢や暮の春
寢佛を刻み仕舞へば春くれぬ
（右二句、遺稿）

行春

ゆく春や逡巡として遲さくら
行春や選者をうらむ歌の主
洗足の盥も漏りてゆく春や
けふのみの春を歩いて仕舞けり
召波の別業に遊びて
行春や白き花見ゆ垣のひま
行春やむらさきさむる筑波山
まだ長うなる日に春の限りかな
ゆく春や横河へのぼるいもの神
（右八句、句集）
おき〳〵に物思ふ春の行衛かな
ゆく春や眼にあはぬ眼鏡失ひぬ
行春やおもき頭をもたげぬる
行春や歌も閉えず宇佐の宮
行春のいづち去けんかゝり舟
（右五句、遺稿）
行春やおもたき琵琶の抱心（後篇）

春惜しむ

春惜しむ座主の聯句に召されけり
春惜しむ宿や近江の置炬燵
（右二句、句集）
春惜しむ人や榎にかくれけり（遺稿）
手燭して庭踏む人や春惜しむ（後篇）

彌生盡

色も香やうしろ姿や彌生盡

天文

霞

野霞
草霞み水に聲なき日ぐれ哉
指南車を胡地に引き去る霞かな
高麗舟のよらで過ぎゆく霞かな
（右三句、句集）
殊更に唐人座敷初霞
背の低き馬に乘る日の霞かな
山寺や撞きそよなひの鐘霞む

東風

（右三句、後篇）

海越えて霞の網へ入る日かな

暖簾に東風吹くいせの出店哉

河内路や東風吹き送る巫女が袖

（右二句、句集）

春風

無爲庵會

曙のむらさきの幕や春の風

野ばかまの法師が旅や春の風

片町にさらさ染るや春の風

（右三句、句集）

春風のつまかへしたり春曙抄

春風に阿闍梨の笠の匂ひかな

（右二句、遺稿）

春風馬堤曲

春風や堤長うして家遠し（後篇）

春風のさす手ひく手や浮人形

陽炎

郊外

陽炎や名も知らぬ虫の白き飛ぶ

陽炎や簀に土をめづる人

（右二句、句集）

春雨

陽炎やひそみもあえず土龍（遺稿）

西の京にばけもの栖て久しく荒れ果てたる家ありけり、今はその沙汰なくて

春雨や人住みて煙壁を洩る

物種の袋ぬらしつ春の雨

春雨や身にふる頭巾着たりけり

春雨や小磯の小貝ぬるる程

澁口に灯をよぶ犀や春の雨

蓴菜生ふ池の水かさや春の雨

夢中吟

春雨やもの書かぬ身のあはれなる

春雨や暮れなむとして今日もあり

春雨やものがたり行く蓑と笠

柴漬の沈みもやらで春の雨

春雨やいざよふ月の海半ば

春雨や綱が袂に小提灯

小原にて

春雨の中におぼろの清水かな

雛店の灯をひく頃や春の雨

春の月

朧月

（右十四句、句集）

春雨や珠數落したる濠

春雨にぬれつゝ屋根の手毬かな

池と川ひとつになりぬ春の雨

春雨や鶴の七日を降り足らず

春雨や同車の君がさゞめごと

春雨の中を流るる大河かな

粟島へはだし參りや春の雨

春雨に下駄買ふ初瀬の法師かな

春雨にぬるる磨の背中かな

春雨や蛙の腹は未だぬれず

春の雨穴一のあなにたまりけり

（右十一句、遺稿）

粟飯一椀の爲めに五十年の歡樂をむなしくせんよりは、葉に遊び花に戯れ、覺めて後、悔みなからんには

春雨や菜飯にさます蝶の夢（後篇）

春月や印金堂の木の間より（句集）

春夜聞琴

雪解

焼野

瀟湘の雁の涙やおぼろ月

女倶して内裏おがまむおぼろ月

藥盗む女やは有るおぼろ月

よき人を宿す小家やおぼろ月

さしぬきを足で脱ぐ夜や朧ろ月

（右五句、句集）

朧ろ月大河をのぼる御舟かな

おぼろ月蛙ににごる水や空

月おぼろ高野の坊の夜食時

（右三句、遺稿）

伽羅くさき人のかり寝や朧月

草臥てもの乞ふ宿やおぼろ月

手枕に身を愛すなりおぼろ月

（右三句、後篇）

地理

雪解や妹が炬燵に足袋かたし（遺稿）

曉の雨やすぐろの芒原

しののめに小雨降り出す燒野哉

野ととゝに燒る地藏の燈かな

（右三句、句集）

もの焚た乞食の火より燒野哉（後篇）

水温む　水ぬるむ頃や女の渡守

春の水　橋なくて日暮れんとする春の水

春水や四條五條の橋の下

足弱の渡りて濁る春の水

春の水背戸に田作らんとぞ思ふ

春の水にうたた鵜縄の稽古かな

蛇を追ふ鰌のおもひや春の水

（右六句、句集）

小舟にて僧都送るや春の水

流れ來る清水も春の水に入る

湖や堅田わたりを春の水

里人よ八橋つくれ春の水

春の水　春の水薑つばなをぬらし行く

畫舟に狂女のせたり春の水

流れ來て池に戻るや春の水

（右七句、遺稿）

重箱を洗うて汲むや春の水

春の水山なき國を流れけり

烏帽子着て誰やら渡る春の水

（右三句、後篇）

春の海　枕する春の流れや亂れ髪

春の海ひねもすのたり〳〵哉（句集）

夢に播磨湯に舟を浮ぶ

帆虱のふとし流さん春の海（後篇）

苗代　苗代や鞍馬の櫻ちりにけり（句集）

苗代にうれしき餌の行方かな（後篇）

人事

春夜廬會

爐寒ぎ　爐寒ぎて南阮の風呂に入る身哉

爐ふさぎや床は維摩に掛替る

（右二句、句集）

爐寒てたち出る旅のいそぎ哉（遺稿）

出代　出代や春さめ〳〵と古葛籠（句集）

やぶ入の夢や小豆の煮るうち

藪入　藪入やよそめながらの愛宕山

やぶいりや守袋か忘れ草

やぶ入や鐵漿もらひ來る傘の下

やぶ入は中山寺の男かな

（右五句、句集）

やぶいりの宿は狂女の隣かな

やぶ入や鳩にめでつゝ男山

やぶ入を守れ子安の地藏尊

（右三句、遺稿）

春風馬堤曲

初午　藪入や溟花を出でて長柄川（後篇）

初午やその家々の袖たゝみ

はつむまや鳥羽四つ塚の鷄の聲

初午や物種賣に日のあたる

（右三句、句集）

早春

御忌詣　浪華女や京を寒がる御忌詣

御忌の鐘ひゞくや谷の氷まで

（右二句、句集）

御忌の鐘時なき京のうれり哉（後篇）

壬生念佛　永き日をいはで暮るゝや壬生念佛（遺稿）

彼岸　ある人のもとにて

命婦より牡丹餅たはす彼岸かな（句集）

芭蕉庵會

畑打　畑うつや動かぬ雲もなくなりぬ

畑打よこちの在所の鐘が鳴る

畑打や木の間の寺の鐘供養

畑うちや法三章の札のもと

畑うつや鳥さへ鳴かぬ山かげに

耕や五石の粟のあるじ顏

（右六句、句集）

畑打や我家も見えて暮遲し

一本、暮れかゝる、暮れかぬる

畑うつや道問ふ人の見えずなりぬ

畑打の目に離れずよ靡耶が嶽

畑打や耳うとき身の唯一人

畑打や峯の御坊の鷄の聲

（右五句、遺稿）

鋤の賛

種俵　畑に田に打出の鋤や小槌より

畑打や細き流をよすがなる

（右二句、後篇）

よもすがら音なき雨や種俵（句集）

種おろし　古河の流を引きつ種おろし（句集）

接木　垣越にものうち語る接木かな（句集）
　　菜畠にきせる忘るゝ接木かな（遺稿）

凧　いかのぼり昨日の空のありどころ
　　藪入の跨いで過ぎぬ凧の糸
　　（右二句、句集）

雛祭　上巳
　　古雛やむかしの人の袖几帳
　　箱を出る顔忘れめや雛二対
　　たらちねのつゝますありや雛の鼻
　　（右三句、句集）
　　雛の灯にいぬきが抉かゝるなり
　　衣手は露の光や紙雛
　　（右二句、遺稿）

茶摘　一とせの茶も摘みにけり父と母（後篇）

海苔取　海苔掬ふ水の一重や宵の雨（後篇）
　　一本、おぼろ月

花見　曉豪が伏見嵯峨に遊べるに伴ひて
　　夜桃林を出てあかつき嵯峨の櫻人
　　花に暮れて我が家遠き野道かな
　　日暮るゝほど嵐山を去る
　　嵯峨へ歸る人はいづこの花に暮れし
　　傾城は後の世かけて花見かな
　　花に舞はで歸るさ憎し白拍子
　　花に來て花にいねぶるいとまかな
　　据風呂に後夜きく花のもどりかな
　　やごとなき御かたのかざりおろさ
　　せ給ひて、かゝるさびしき地に住
　　み給ひけるにや
　　小冠者出て花見る人を咎めけり
　　（右八句、句集）
　　花に暮れぬわが住む京に歸去來
　　花見戻丹波の鬼のすだく夜に
　　祇や鑑や花に香炷ん草むしろ
　　（右三句、遺稿）
　　石高な都よ花の戻り足（後篇）
　　一片花飛滅却春
　　櫻狩美人の腹や滅却す（句集）

櫻狩　花守の身は弓矢なき案山子かな（後篇）
　　雨日嵐山にあそぶ

花衣　筏士の裳やあらしの花衣（句集）

動物

鶯

離落　鶯のあちこちとするや小家がち
　　鶯の聲遠き日も暮れにけり
　　うぐひすの鳥相がましき初音哉
　　うぐひすを雀かと見しそれも春

晝寢　うぐひすや賢こ過ぎたる軒の梅
　　鶯の日枝をうしろに高音哉
　　うぐひすや家内揃うて飯時分
　　うぐひすや茨くゞりて高う飛ぶ
　　うぐひすの啼くや小さき口開て
　　（右九句、句集）
　　うぐひすの枝ふみはづす初音哉
　　うぐひすや堤を下る竹の中
　　今朝來つる鶯と見しになかで去る
　　うぐひすにひれもす遠し畑の人
　　留主守のうぐひす遠く聞く日哉
　　篁にうぐひす啼くやわすれ時
　　うぐひすの啼くやあち向こちら向
　　鶯や野中の墓の竹百竿
　　撞木町うぐひす西に飛び去りぬ
　　うぐひすはやよ宗任が初音かな
　　うぐひすや柏峠をはなれかれ
　　うぐひすや梅ふみこぼすのり盥
　　うぐひすや笠縫の里の里はづれ
　　啼きあへでうぐひす飛ぶや山おろし
　　わが宿のうぐひす聞かん野に出でて
　　家にふらでうぐひすきかぬ一日かな
　　（右十六句、遺稿）
　　うぐひすの二聲耳のほとりかな
　　鶯のなくやうどのの河柳
　　烏來て鶯餘所へいなしぬる
　　低き木に鶯なくや晝下り

老鶯兒　春もやゝあな鶯よむかし聲
　　（右五句、後篇）

歸雁　雁立て鶯破田螺の戸を閉る

燕

雁行て門田も遠く思はるゝ
歸る雁田毎の月の曇る夜に
きのふ去に今日去に雁のなき夜かな
（右四句、句集）
花に去ぬ雁の足あとよめかぬる
立つ雁の足あとよりぞ春の水
（右二句、遺稿）
大津繪に糞落しゆく燕かな
大和路の宮も藁家もつばめ哉
つばくらや水田の風に吹かれ顔
燕啼て夜蛇を打つ小家かな
（右四句、句集）
細き身を子により添る燕かな
ふためいて金の間を出る燕かな
飛魚となる子育るつばめ哉
（右三句、遺稿）
乙鳥や去年も來しと語るかも
わりなしや燕巣作る塔の前
（右二句、後篇）
泥障しけここぞ雲雀の聞どころ（後篇）

雲雀

親雀

飛びかはすやたけごころや親雀（後篇）
日暮るゝに雉子うつ春の山邊かな
柴刈に砦を出るや雉の聲
亀山へ通ふ大工やきじの聲
兀山や何にかくれてきじの聲
むくと起きて雉子追ふ犬や寶寺
木瓜の陰に頡頏ひ住むきゞす哉
きじ啼や草の武藏の八平氏
きじなくや坂を下りの驛舍
（右八句、句集）
雉子なくやこゝいなのめの朝日山
きじ啼くや御里御坊の苣畠
河内女の宿に居ぬ日やきじの聲
（右三句、遺稿）
きじ打て歸る家路の日は高し（後篇）

雉子

若鮎

若鮎や谷の小笹も一葉ゆく
鮎汲の終日岩に翼かな
一本、本のまゝ
（右二句、後篇）

蛙

凡董が蛙合傘しけるに

田螺

月に聞て蛙ながむる田面かな
閣に坐して遠き蛙をきく夜かな
苗代の色紙に遊ぶ蛙かな
日は日くれよ夜は夜明けよと啼く蛙
連歌して戻る夜鳥羽の蛙かな
獨鈷鎌首水かけ論の蛙かな
（右六句、句集）
たゝずめば遠くも聞ゆ蛙かな（遺稿）
泳ぐ時寄る邊なぎさの蛙かな
うかれ出て背々の蛙かな
風なくて雨降れと呼ぶ蛙かな
（右三句、後篇）
そこ〳〵に京見過しぬ田螺賣
なつかしき津守の里の田螺あへ
靜さに堪へて水澄たにし哉
（右三句、句集）
鍬そゝぐ水や田螺の戸々による（遺稿）
揚土の小雨つれなき田螺かな
拾ひのこす田螺に月の夕かな
（右二句、後篇）

蝶

うつつなきつまみ心の胡蝶哉（句集）
釣鐘にとまりて眠る胡蝶かな（遺稿）
伊勢武者の鎧にとまる胡蝶かな
島原の草履に近き胡蝶かな
（右二句、後篇）

蜂

山蜂や木の丸殿の雨の中
出舟や蜂うち拂ふみなれ棹
（右二句、遺稿）

蠶

今年より蠶はじめぬ小百姓（遺稿）
神棚の灯は怠りし蠶時（後篇）

梅

植物

草庫

二もとの梅に遲速を愛す哉
梅折て皺手にかこつ薫かな
白梅や墨芳しき鴻臚館
白梅や誰がむかしより垣の外
舞々の場まうけたり梅がもと
出べくとして出ずなりぬ梅の宿
宿の梅折取る程になりにけり

摺子木にて重箱を洗ふが如くせよ
とは政の嚴刻なるをいましめ給ふ
賢き御代の春にあふて

隈々に殘る寒さや梅の花
白梅や北野の茶屋に相撲取
むめ散るや螺鈿こぼるゝ卓の上
梅咲て帶買ふ室の遊女かな
源八をわたりて梅のあるじ哉
燈を置かで人あるさまや梅が宿
あらむつかしの假名遣ひやな、字
義に害あらずんば、あゝまゝよ。
梅咲きぬどれがむめやらうめぢややら
白梅の枯木に戻る月夜かな
小豆賣る小家の梅の蕾がち
梅遠近南すべく北すべく
（右十七句、句集）
一羽來て寢る鳥は何梅の月
塊に苦うつ梅のあるじ哉
さむしろを畠に敷て梅見哉
水に散て花なくなりぬ岸の梅

かはほりのふためき飛ぶや梅の月
野路の梅白くも赤くもあらぬかな
風鳥の喰ひこぼしや梅の風
白梅や忘れ花にも似たる哉
梅が香の立ちのぼりてや月の暈
散るたびに老い行く梅の梢かな
（右十句、遺稿）
鳴瀧の植木屋が梅咲きにけり
具足師が古きやどりや梅の花
御勝手に春正が妻か梅の月
梅園に褌引する主かな
蓑虫の古巣にそうて梅二輪
一本、梅の花
（右五句、後篇）
莚帆に香をうつし飛ぶ岸の梅
梅が香やひそかにおもき袈裟
むくつけき僕具したる梅見かな
こちの梅も隣の梅も咲きにけり
無緣寺の日をなつかしみ梅の花

臨終

紅梅

白梅に明る夜ばかりとなりにけり
紅梅や比丘より劣る比丘尼寺
紅梅の落花燃ゆらむ馬の糞
（右二句、句集）
紅梅や入日の裏ふ松かしは（遺稿）

柳

禁城春色曉蒼々
青柳や我大君の草か木か
若草に根をわすれたる柳かな
梅ちりて寂しくなりし柳かな
捨てやらで柳さしけり雨のひま
青柳や芹生の里の芹の中
出る杭をうたうとしたりや柳かな
（右六句、句集）
不二おろし十三州の柳かな
柳にもやどり木はあり柳下惠
門前の蓮が柳糸かけぬ
風吹かぬ夜はものすごき柳哉
柳から日の暮れかゝる野道かな
（右五句、遺稿）
一筋も捨つる枝なき柳かな

蕗の薹

君行くや柳絲に道長し
茶店の老婆子儀を見て、慇懃に無
恙を賀し、且つ儀が春衣を羨む。
一軒の茶店の柳老いにけり
（右三句、後篇）
三尺の鯉くゞりけり柳影
苔とは汝も知らずよ蕗の薹（句集）
これぎりに徑盡きたり芹の中
古寺やほうろく捨る芹のなか
（右二句、句集）
古道に今日は見ておく根芹かな（後篇）

蓬

裏門の寺に逢着す蓬かな（句集）

菫

居りたる舟を上れば菫かな
骨拾ふ人にしたしき菫かな
（右二句、句集）

菜の花

春景
菜の花や月は東に日は西に
菜の花や箏見ゆる小風呂敷
菜の花や鯨も寄らず海暮れぬ
（右三句、句集）

椿

菜の花や皆出拂ひし矢走舟
菜の花や晝ひとしきり海の音
菜の花や油乏しき小家がち
菜の花や法師が宿はとはで過し
菜の花や遠山鳥の尾の上まで
菜の花や廢耶を下れば日の暮るゝ
（右六句、句集）
菜の花や和泉河内へ小商ひ
菜の花に僧の脚絆のさがりけり
（右二句、後篇）

或る隱士のもとにて

古庭に茶筌花さく椿かな
あぢなさや椿落ちうづむ潦
玉人、蚩右にひらく椿かな
（右三句、句集）
はら〳〵と霰ふり過ぐる椿かな
椿落ちて昨日の雨なこぼしけり
（右二句、遺稿）

黄石公の自畫贊

沓ぬとす音のみ雨の椿かな

桃

鏘祭る都はづれや桃の月
喰うて寢て牛にならばや桃の花
商人を吼ゆる犬あり桃の花
櫻より桃にしたしき小家かな
家中衆に狹むしろ振ふ桃の宿
（右五句、句集）
桃の花散るや任日去りてのち（遺稿）
交へ折て白桃くるゝ嬉しさよ
雨の日や都に遠き桃の宿
（右二句、後篇）

梨の花

甲斐が根に雲こそかゝれ梨の花
梨の花月に書よむ女あり
（右二句、句集）

海棠

海棠や白粉に紅あやまてる（遺稿）

初櫻

旅人の鼻まだ寒し初ざくら（句集）

糸櫻

糸櫻贊

行き暮れて雨もる宿や糸ざくら（句集）
糸ざくら灯は孤の書院かな（後篇）
智恩院の一重櫻は咲きにけり（後篇）
手枕の夢はかざしの櫻かな

一重櫻

山櫻

嵯峨ひと日閑院樣のさくら哉
（以上二句、句集）
櫻ひと木春に背けるけはひ哉
清輔は花にも帶を烏帽子かな
山寺の冷飯寒きさくらかな
馬下りて高根の櫻見つけたり
（右四句、遺稿）
昨日けふ高嶺の櫻見えにけり

送　別

門口の櫻を雲のはじめかな
（右二句、後篇）
剛力は徒に見過ぎぬ山ざくら
暮れんとす春を小鹽の山ざくら
錢買うて入るや吉野の山ざくら
歌屑の松に吹かれて山ざくら
まだきとも散りしとも見ゆれ山櫻
みよし野の近道寒し山ざくら
海手より日は照りつけて山ざくら
（右七句、句集）
飢鳥の花踏みこぼす山ざくら

遲櫻

一本、鳥飢ゑて
人間に營なくや山ざくら
平地ゆきてことに遠山櫻哉
さびしさに花咲きぬめり山櫻
（右四句、遺稿）
くさめにも散りてめでたし山櫻（後篇）
柏木の廣葉見するや遲ざくら（遺稿）
足弱の宿とるためか遲ざくら
風靡のなり居の君や遲ざくら
（右二句、後篇）

花

吉　野

花に遠く櫻に近し吉野川
花の御能過ぎて夜を泣く涙花人

高野を下る日

かくれ住で花に眞田が謠かな
玉川に高野の花や流れ去る
なら道や當麻ばたけの花一木
花の香や嵯峨のともし火消ゆる時

なには人の木屋町に宿りぬしを訪ひて

花を踏みし草履も見えて朝寢かな
蛩のたま〳〵啼くや花の山
ねぶたさの春は御室の花よりぞ
花の幕兼好を覗く女あり
（右十句、句集）
下屋敷僧都の花も隣りけり
花に啼く聲としもなき燕かな
花に來て膾をつくる嫗かな
みよし野に花盗人はなかりけり
から寢するいとまを花の主かな
（右五句、遺稿）
吉野を出る日は雨風烈しくて
雲を呑んで花を吐くなる吉野山
隱口塚のはし文に
草臥て寢にかへる花の主かな
花七日物食はずとも書畫の會
翁百回忌に
空に降るはみよし野の櫻さがの花
（右四句、後篇）
月光西に渡れば花影東に歩むかな

花ざかり

花ざかり六波羅禿見ぬ日なき
又平に逢ふや御室の花ざかり
（右二句、遺稿）

落花

風入馬蹄輕
木の下が蹄の風や散るさくら
花ちるや重たき笈のうしろより
阿古久曾のさしぬきふるふ落花哉
花ちりて木の間の寺となりにけり
（右四句、句集）
櫻ちる苗代水や星月夜
櫻散て刺ある草の見ゆるかな
身に更に散りかゝる花や下り坂
むき蜆石山の櫻ちりにけり
散るはさくら落つるは花の夕べかな
散り積みて筏も花の梢かな
烏帽子脱て升よとはかる落花かな
（右七句、遺稿）
花下に聯句して春を惜しむ
祇や鑑や髭に落花ふ捻りけり
一本、髭に散る花捻りけり

春の草
三味線草
蕨
三月菜
若和布
躑躅

箒の贅

行く春の尻べた掃ふ落花かな
檜笠辭
花散りて身の下闇や檜笠
守武貞德を初め、其角嵐雪にいたりて十四人の俳仙を畫きてありけるに、贊詞を乞はれて
花散り月落て文斯にあら有難や
（右四句、後篇）
わが歸る道筋ぞ春の草
琴心桃美人
妹が垣根さみせん草の花咲きぬ（句集）
蕨野やいざ物焚かん枯つゝじ（句集）
吉野出て又珍らしや三月菜（後篇）
草の戸や二見のわかめ貰ひけり（後篇）
つゝじ野やあらぬ所に麥畑
躑躅咲て石移したる嬉しさよ
近道へ出てうれし野の躑躅かな
つゝじ咲て片山里の飯白し
岩に腰我頼光のつゝじかな

山吹

（右五句、句集）
石工の指やぶりたるつゝじかな
大原や躑躅の中に藏立てて
（右二句、遺稿）
かく夜長帶刀はさうなき數奇もの
なりけり。古貧部の入道はじめての下山に引出物見ずべきとて、錦の小袋をさしもとめける風流など思ひ出つゝ、すゞろ春色にたへず侍れば、
山吹や井手を流るゝ飽屑（句集）
朗詠
山吹なのがれて露の聖かな（後篇）
人なき日藤に培ふ法師かな
山もとに米踏む音や藤の花
うつむけに春うちあけて藤の花
（右三句、句集）
月に遠くおぼゆる藤の色香かな（遺稿）
藤の花あやしき夫婦休みけり
柴の戸に明暮かゝる白雲をいつ柴

藤

の色と見なさむ
法然の球數もかゝるや松の藤

夏之部

時候

卯月

巫子町によききぬすます卯月哉（後篇）
雲裡房に橋立に別る

短夜

短夜や六里の松に更たらず
みじか夜や毛虫の上に露の玉
みじか夜や同心衆の川手水
短夜や枕にちかき銀屏風
みじが夜や芦間流るゝ蟹の泡
みじか夜や二尺落ち行く大井川
探題老犬
みじか夜を眠らで守るや翁丸
みじか夜や涙うち際の捨簾
みじか夜やいとま賜はる白拍子
みじか夜や小見世明けたる町はづれ
（右二句、後篇）
東都の人を大津の驛に送る
みじか夜や一つあまりて志賀の松
みじか夜や伏見の戸ぼそ淀の窓
（右十二句、句集）
短夜や金も落さぬ狐づき
嵯峨吟行
短夜の闇より出でて大井川
みじか夜や思ひもよらぬ夢の告
みじか夜や吾妻の人の嵯峨泊り
短夜や淺瀬にのこる月一片
（右五句、遺稿）
短夜や足跡淺き由井の濱
みじか夜や芒生ひそふ垣のひま
短夜の闇となりたる二十日かな
みじか夜や八聲の鳥は八つに鳴く

明易き

短夜や葛城山の朝ぐもり
（右五句、後篇）
よすがら三本樹の水樓に宴して
明易き夜をかくしてや東山（句集）
明やすき夜や稲妻の鞘走（遺稿）
明易き夜や住の江の忘れ草（後篇）

麥秋

病人の駕も過ぎけり麥の秋（句集）
麥秋や何に驚く屋根の鷄
麥秋やひと夜は泊る甥の法師
飯盗む狐追ひうつ麥の秋
一本、狐追ふ聲や
（右三句、遺稿）
麥秋や鵙鳴くなる長がもと
麥秋や遊行の棺通りけり
麥秋や狐の退かぬ小百姓
むぎの秋淋しき戀の狂女哉
辻堂に死せる人あり麥の秋
（右五句、後篇）

暑さ

日歸りの兀山越る暑さかな
居りたる舟に寢てゐる暑さ哉

涼

探題寄扇武者
暑き日の刀にかゆる扇かな
蝸居して妻子を避る暑かな
（右四句、句集）
病人の駕籠の蠅追ふ暑かな（後篇）
涼しさや都を竪にながれ川
涼しさや鐘をはなるゝ鐘の聲
（右二句、句集）
汐煙消えて山より日は涼し
出羽の國より陸奥の方へ通りけるに、山中にて日暮れければ、辛うじて九十九袋といへる村にたどりつきて宿りをもとめぬ。夜すがらこと〳〵と物の音の騒くありければ、あやしく立ち出でてみるに、古寺の廣庭に老たるをのこの麥をつくにてありけり。予もそこら徘徊しけるに、月孤峯の頂を照らし風千竿の竹を吹いて、朗夜のけしきいふばかりなし。此をのこ蓋の

暑さないとひて、かくいとなむなりと。やがて立ちよりて名は何といふぞと問へば、宇兵衛と答ふ。涼しさに麥を月夜の卯兵衛かな
（右二句、後篇）

天文

宮島

薫風

薫風やともしたて兼ねつ嚴島（句集）
高紐にくくる兜や風かをる（後篇）

涼風

夕風や水青鷺の脛をうつ（句集）
襟に吹く風新らしき心地かな

五月雨

五月雨のうつぼ柱や老が耳
湖へ富士をもどすや五月雨
五月雨や大河を前に家二軒
五月雨や佛の花を捨てに出る
小田原で合羽買ひたり五月雨
五月雨の大井越たるかしこさよ
五月雨田毎の闇となりにけり
（右七句、句集）

五月雨や美豆の寂寞の小家がち
五月雨や名もなき川のおそろしき
（右二句、遺稿）
床低き旅のやどりや五月雨
五月雨や滄海を衝く濁り水
五月雨や水に錢ふむわたし舟
濁り江に鵜の玉の緒や五月雨
掻げあへぬはたし詣りや五月雨
五月雨や鵜さへ見えなき淀桂
五月雨や貴船の社燈消ゆる時
閼伽桶に何の花ぞも五月雨
あか汲みて小舟あはれむ五月雨
五月雨の堀たのもしき砦かな
浮草も沈むばかりよ五月雨
近道や水踏み渡る五月雨
五月雨や鳥羽の徑を人の行く
五月雨に見えずなりぬる徑かな
紙燭して廊下通るや五月雨
五月雨のかくて暮れ行く月日哉
（右十六句、後篇）

夕立

丸山主水が費きたる蝦夷の圖に昆布で葺く軒の雫や五月雨（新花摘）
双林寺獨吟千句
夕立や箒もかはさず一千言
白雨や門脇どのゝ人たまり
一本、脇坂
夕立や草葉をつかむ村雀
（右三句、句集）

雲の峰

旅意
廿日路の背中にたつや雲の峰
揚州の津も見えそめて雲の峰
雨となる戀は知らじな雲の峰
雲の峰四澤の水の涸れてより
（右四句、句集）
飛びのりの戻り飛脚や雲の峰
曠野行く身に近づくや雲の峰
雲の峰に肘する酒顛童子かな
（右三句、遺稿）
宋阿三十三回
花の雲三重にかされて雲の峰（後篇）

夏の月

夜水とる里人の聲や夏の月
堂守の小草ながめつ夏の月
ぬけがけの淺瀨渡るや夏の月
河童の戀する宿や夏の月
（右四句、句集）
石陣のほとり過ぎけり夏の月
殿守のそこらを行くや夏の月
賊舟をよせぬ御船や夏の月
（右四句、遺稿）
遠淺に兵船や夏の月（後篇）
負腹の守敏も降らず旱かな（句集）

旱

草いきれ

草いきれ人死に居ると札の立つ（句集）

地理

夏野

夏山

夏山や通ひ馴れたる若狭人（句集）
夏山やうちかたむいてろくろ引（遺稿）
夏山や神の名はいざ白幣
夏山や京盡し飛ぶ鷺ひとつ
（右二句、後篇）
おろしおく笈に地震ふる夏野かな

清夏

水川

行き〳〵て更に行き行く夏野かな
（右二句、句集）

鮒鮓の便りも遠き夏野哉（遺稿）

實方の長櫃通る夏野かな

討ちはたす梵論連立て夏野かな
（右二句、後篇）

丹波の加悦といふ所にて

夏河を越すうれしさよ手に草履（句集）

石工の鑿冷したる清水かな

落ち會うて音なくなれる清水かな

一本、音なくなりし

丸山主水が小さき龜をうつしたるに贄せよと望みければ、仕官懸命の地に榮利を求めんよりは、若かじ尾を泥中に曳かんには

鏡龜や青砥も知らぬ山清水

二人してむすべば濁る清水かな

我が宿にいかに引くべき清水哉
（右五句、句集）

水晶の山路分け行く清水かな

石工の飛火流るゝ清水かな

しづかさや清水踏み渡る武者草鞋
（右三句、遺稿）

人事

更衣

絹着せぬ家中ゆゝしき更衣

辻駕籠によき人のせつ更衣

大兵のはたちあまりや更衣

ころもがへ印籠買に所化二人

眺望

更衣野路の人はづかに白し

痩脛の毛に微風あり更衣

御手討の夫婦なりしを更衣

更衣いやしからざるはした饒
（右八句、句集）

ころもがへいわけなき身の田虫哉

ころもがへうしと見し世も忘れ顔

二十五の鵙起やころもがへ

ものくるゝ人來ましけり更衣

更衣布子の恩のおもさかな

袷

更衣人も五尺のからだかな

更衣狂女の眉毛いわけなき

更衣塵うち拂ふ朱の奢
（右八句、遺稿）

更衣むかしに遠き病上り

更衣金覆輪の鞍置かん

一渡し越べき日なり更衣

かりそめの戀をする日や更衣

ころもがへ身に白露の初めかな

ころもがへ母なん藤原氏なりけり

更衣八瀬の里人ゆかしさよ
（右七句、後篇）

たのもしき矢數の主の袷かな

知れるおうなの許より、古ききぬの絹ぬきたるに、文添ひておくりければ

橘のかごとがましきあはせかな
（右二句、句集）

那須七騎弓矢に遊ぶ袷かな

袴着て身も世にありのすさびかな
（右二句、遺稿）

ゆきたけもきかで流人の袷かな

小原女の五人揃うて袷かな

西行は死にそこなうて袷かな
（右三句、後篇）

灌佛

灌佛は裸なしめすはじめかな

大佛のこれがならるゝ八日かな

灌佛やもとより腹はかりのやど

卯月八日死で生るゝ子は佛
（右四句、後篇）

節句

藥園に雨降る五月五日かな（後篇）

家古りて幟見せたる翠微かな

木がくれて名譽の家の幟かな
（右二句、後篇）

粽

涙花の一本亭に訪れて

粽解て蘆吹く風の音聞かん（句集）

麥刈

兎足三周の正當は文月中の四日なるを、卯月のけふに縮めて追善營みけるに申し遣はす

麥刈りぬ近道來ませ法の杖（句集）

田植

麥刈て遠山見せよ窟の前
麥刈に利き鎌もてる翁かな
（右二句、遺稿）

麥刈て瓜の花まつ小家かな（後篇）
離別れたる身を踏込て田植かな
鯰得て歸る田植の男かな
（右二句、句集）

見渡せば蒼生よ田植時（遺稿）
おくびなり序がましき田植かな
けふはとて嫁も出で立つ田植哉
泊りがけの伯母もむれつゝ田植哉
三河なる八橋も近き田植かな
雨ほろ〳〵曾我中村の田植かな
午の貝田歌音なくなりにけり
獨を打し翁も誘ふ田植かな
（右七句、後篇）

早乙女　早乙女や黄楊の小櫛はさゝで來し（後篇）
田草取　葉ざくらの下蔭たどる田草取（後篇）
奏祭　草の雨祭の車過ぎて後（句集）
棘供養　れり供養まつり顔なる小家かな（後篇）

祇園會

七日

祇園會や眞葛が原の風薫る
祇園會や僧の訪ひよる梶が許
（右二句、句集）

施米　腹あしき僧こぼしゆく施米哉（句集）
夏神樂　裸身に神うつりませ夏神樂（句集）
若彌宜のすが〳〵しさよ夏神樂
御祓　つくばうた彌宜でことすむ御祓かな
炙のない背中流すや夏はらひ
出水の加茂に橋なし夏祓
鴨川のほとりなる田中といへる里にて
夕顔に秋風そよぐみそぎ川
（右四句、句集）

木藥の帶流るゝみそぎ川（遺稿）

蚊帳　蚊屋の内に螢放してアゝ樂や
尼寺やよき蝸たるゝ宵月夜
あら涼し裾吹く蚊帳も根なし草
蚊帳な出て内に居ぬ身の夜は明けぬ
諸子比枝の僧房に會す。余はいた

蚊遣

つきのために此行にもれぬ
蚊帳つりて翠微つくらむ家の内
（右五句、句集）

蚊帳の中に朧月夜の内侍かな（遺稿）
顔白き子のうれしさよまくら蝸
僧とめてうれしと蚊帳を高う釣る
草の戸によき蚊帳たるゝ法師哉
（右三句、後篇）

蚊遣してまゐらす僧の坐右かな
嵯峨にて
三軒屋大阪人のかやりかな
垣越て蓑の避け行くかやり哉
（右三句、句集）

學びする机の上の蚊遣かな
いざさらば蚊遣のがれん虎溪まで
腹あしき隣同志の蚊遣かな
いとまなき身に暮れかゝる蚊遣哉
雨にもゆる鶏飼が宿の蚊遣かな
一日のけふも蚊やりのけぶりかな
（右六句、遺稿）

竹婦人　燃え立て顔耻かしき蚊やりかな
抱籠　浴して蚊遣に遠きあるじかな
簞笥　蚊遣して宿りうれしや草の月
蚊遣火や柴門多く相似たり
（右四句、後篇）

川　花頂山に會して探題
河床　蓑居士はかたい親父よ竹婦人（句集）
天にあらば比翼の籠や竹婦人（遺稿）
抱籠やひと夜ふしみのさゞめごと
ある方にて
弓取の帶の細さよたかむしろ
細脛に夕風さはるたかむしろ
（右二句、句集）

葛圃が魂をまねく
河床や蓮からまれく便りにも
川床に僧き法師の立居かな
（右二句、句集）

矢數　大矢數弓師親子もまゐりたる
少年の矢數問ひ寄る念者ぶり
ほの〴〵と弼に明けゆく矢數かな

（右三句、後篇）

風鈴　若楓矢數の册もみぢせよ
　　風鈴や花にはつらき風ながら

畫寢　蠅いとふ身を古郷に畫寢かな（句集）

掛香　掛香や何にとゞまる蟬衣
　　掛香や啞の娘のひとゝなり
　　掛香やわすれ顔なる袖疊
（右三句、句集）

虫干　虫干や甥の僧訪ふ東大寺（句集）
　　いさゝかな料理出來たり土用干（遺稿）

夏書　夏百日墨もゆがまぬ心かな
　　日を以て數ふる筆の夏書かな
（右二句、句集）

　　味噌汁をくはぬ娘の夏書かな
　　たもとして拂ふ夏書の机かな
（右二句、後篇）

扇　雁宕久しくおとづれせざりければ
　　有と見えて扇の裏絵おぼつかな
　　とかくして笠になしつる扇かな
　　渡し呼ぶ草のあなたの扇かな

（右三句、句集）

團扇　戀ひわたる鎌倉武士の扇かな
　　眼に嬉し戀君の扇眞白なる
　　主しれぬ扇手どりに酒宴かな
（右三句、遺稿）

　　古扇二本さしたる下部かな（後篇）
　　繪うちはのそれも清十郎にお夏かな
　　手すさびの團扇蜑かん草の汁
（右二句、句集）

　　任口に白き團扇をまゐらせん
　　後家の君たそがれ顔の團扇かな
（右二句、遺稿）

　　突きさして團扇わするゝ俠かな
　　木刀を受くべき猛者の團扇かな
　　揮に團扇さしたる亭主かな
（右三句、後篇）

甘酒　箱根にて
　　あま酒の地獄も近し箱根山
　　愚痴無智の甘酒造る松が岡
（右二句、句集）

一夜酒　御佛に賽供へけり一夜酒（句集）
　　酒を煮る家の女房ちよとほれた（後篇）

水の粉　水の粉のきのふに盡きぬ草の庵
　　水の粉やあるじ賢き後家の君
（右二句、句集）

葛水　宗鑑に葛水賜ふ大臣かな
　　葛を得て清水に遠きうらみ哉
（右二句、句集）

　　葛水や入江の御所に詣づれば（遺稿）
　　葛水にうつらで嬉し老の顔

翁の贅二句

　　葛水や鏡に息のかゝる時
　　葛水に見る影もなき翁かな
（右三句、後篇）

心太　心太逆しまに銀河三千丈（句集）
　　なれ過ぎた鮓をあるじの遺恨かな
　　鮓桶をこれへと樹下に床几かな
　　鮓つけて誰待つとしもなき身かな
　　鮒すしや彦根の城に雲かゝる
（右四句、句集）

　　夢さめてあはやとひらく一夜ずし
　　木の下に鮓の口切るあるじ哉
（右二句、遺稿）

　　鮓つけてやがて去にたる魚屋かな
　　鮓おしてしばし淋しきこゝろかな
　　鮓をおす我れ酒醸す隣あり
　　鮓をおす石上に詩を題すべく
　　すし桶を洗へば淺き瀨魚かな
　　眞精けの米一升や鮓のめし
　　卓上の鮓に眼寒し觀魚亭
　　すしの石に五更の鐘のひゞき哉
　　寂寞と晝間をすしの熟れ加減
（右九句、後篇）

眞菰刈　水深く利鎌鳴らす眞菰刈（句集）

麻刈　しのゝめや露の近江の麻畠（句集）
　　近江路は麻刈雨の晴間かな
　　麻を刈れと夕日このごろ斜なる
（右二句、後篇）

川狩　鴨川にあそぶ
　　川狩や樓上の人の見知り顔

雨後の月誰ぞや夜ぶりの脛白き
月に對す君に唐綱の水煙
川狩や歸出來といふ聲すなり
（右四句、句集）

鵜飼

春泥舍會東寺山吹にてありけるに
誰住て樗流るゝ鵜川かな
しのゝめや鵜をのがれたる魚淺し
老なりし鵜飼ことしは見えぬ哉
殿原の名古屋顏なる鵜川かな
鵜舟漕ぐ水窮まれば照射かな
（右五句、句集）

照射

夜やいつの長良の鵜舟曾て見し（遺稿）
朝風のふきさましたる鵜川かな
見失ふ鵜の出處や鼻の先
（右二句、後篇）

火串

わが宿にもの忘れ來て照射かな（遺稿）
照射してさゝやく近江八幡かな（後篇）
葉を落ちて火串に蛭の焦る音
宿近く火串もうけぬ雨のひま
雨やそも火串に白き花見ゆる
一本、葉裏々々
谷風に附木吹き散る火串かな
兄弟の獵夫中よきほぐし哉
（右五句、後篇）

雨乞

雨乞に曇る國司の涙かな
大粒な雨は祈りの奇特かな
（右二句、句集）

納涼

加藤の西岸に榻をおろして
丈山の口が過ぎたり夕すゞみ
網打の見えずなり行く涼かな
（右二句、句集）
涼み舟舳にたち盡す列子かな（遺稿）
床涼み笠置連歌のもどりかな
殿ばらは細工めさるや夕すゞみ
（以上二句、後篇）
似た僧のしばしとてこそ夕涼み

動物

時鳥

鞘走る友切丸やほとゝぎす
ほとゝぎす平安城を筋違に

ほとゝぎす柩をつかむ雲間より
春過ぎてなつかぬ鳥や時鳥
時鳥待つや都の空だのめ
大德寺にて
ほとゝぎす繪になけ東四郎五郎
岩倉の狂女戀せよほとゝぎす
稻葉殿の御茶たぶ夜や時鳥
箱根山を越ゆる日、みやこの友に申遣はす
忘るなよほどは雲助ほとゝぎす
歌なくてきぬ〳〵つらし時鳥
探題實盛
名のれ〳〵雨しのはらの時鳥
（右十一句、句集）
はしたなき女孀のくさめや時鳥
大人なる男の子起きけり時鳥
（右二句、遺稿）
留守に居る人たゞならぬ時鳥
松浦の文書く夜半や時鳥
時鳥琥珀の玉をならし行く

閑古鳥

畫贊

摺子木のみそかの闇や時鳥
ほとゝぎす歌よむ遊女聞ゆなる
耳うとき父入道やほとゝぎす
簾たく矢數の空をほとゝぎす
（右七句、句集）
失うた杖も闇の夜ほとゝぎす
柴庵の主人、杜鵑布穀の二題を出して、いづれ一題の發句せよとあり。されば雲井に走つて王侯に交はらんよりは、鶉衣被髮にして山中に名利をいとはんには
狂居士の首にかけたか鶉鼓鳥
閑古鳥寺見ゆ麥林寺とやいふ
山人は人也閑古鳥は鳥なりけり
食次の底たゝく音や閑古鳥
足跡を字にもよまれず閑古鳥
うへ見えぬ笠置の森や閑古鳥
むつかしき鳩の禮儀や閑古鳥
閑古鳥さくらの枝も踏て居る

かんこどり可もなく不可もなく音哉
（右九句、句集）
花なくて隠れよき木やかんこ鳥
榎から榎に飛ぶやかんこ鳥
なに喰うてゐるかも知らず閑古鳥
金掘る山もと遠しかんこ鳥
親もなく子もなき聲やかんこ鳥
わが捨てしふくべが啼くか閑古鳥
鶏鼓鳥木のまたよりや生れけん
閑古鳥昨日もこゝに來鳴きぬる
羽いろも鼠に染めつかんこどり
閑古鳥招けども來ず柊には
（右十句、遺稿）
かしこにて昨日もきゝぬ閑古鳥
閑古鳥賊いさゝか白き鳥飛びぬ
ごつ〳〵と僧都の咳やかんこ鳥
（右三句、後篇）

水鶏

閼の戸に水鶏のそら音なかりけり（句集）
提灯を消せと御意ある水鶏かな（後篇）
朝日奈が曾我か訪ふ日や初鰹

初鰹

初松魚觀世太夫が端居かな
（右二句、後篇）

鮎

鮎くれてよらで過ぎ行く夜半の門（句集）

蝙蝠

蝙蝠やむかひの女房こちを見る（句集）
かはほりの隠れ住みけり破れ傘（御篇）

蟾蜍

遲日亭の宴に
月の旬を吐てへらさん蟾の腹（後篇）
でゞ虫やその角文字のにじり書

蝸牛

蝸牛の住みはてし宿やうつせ貝
こもり居て雨うたがふや蝸牛
（以上三句、句集）
蝸牛何おもふ角の長みじか
簑虫はちゝとも啼くを蝸牛
（以上二句、遺稿）
雨にとまる玉水の宿のかたつぶり
蹇の三熊詣でやかたつぶり
關越るゐざり車やかたつぶり
點滴にうたれてこもる蝸牛
（右四句、後篇）
かたつむや角を力の遠歩き

蟬

寓居

半日の閑を榎や蟬の聲
大佛のあなた宮樣せみの聲
蟬なくや行者の過る午の刻
蟬なくや僧正坊のゆあみ時
（右四句、句集）
鳥まれに水また赤し蟬の聲
ひるがへる蟬のもろ羽や比枝おろし
（右二句、遺稿）
蟬なくや昨日は二日三日の月
蟬なくや行く人絶る橋柱
（右二句、後篇）

羽蟻

飛蟻とぶや富士の裾野の小家より（句集）

螢

狩衣の袖のうら這ふほたる哉（句集）
一書生の閑窓に書す
學問は尻からぬける螢かな
（右二句、句集）
さし汐に雨の細江のほたるかな（遺稿）
握みとりて心の闇のほたるかな（後篇）
玉川のすゑや碎けて散る螢

蜆

蜆

雪信が蜆うちはらふ硯かな（句集）
古井戸や蚊に飛ぶ魚の音くらし
うは風に蚊の流れ行く野川かな
蚊の聲す忍冬の花の散る度に
（右三句、句集）
畫の蚊のこがれてとまる德利かな（遺稿）
袖笠に毛虫をしのぶ古御達
我水に隣家の桃の毛虫かな
朝風の毛を吹く見ゆる毛虫かな
朝風に毛を吹かれ居る毛虫かな
（右四句、後篇）

毛虫

ぼうふりの水や長沙の裏借家（新花摘）

子子

植物

櫻葉

櫻葉や碁氣になり行く奈良の京（遺稿）
葉ざくらや草鹿作る兵等
はざくらや奈良に二日の泊り客
（右二句、後篇）

實櫻

來てみれば夕べのさくら實となりぬ
圓位上人の所願にもそむきたる身

若葉

のいとかなしきさまなり
實櫻や死にのこりたる庵の主
（右二句、句集）
蚊帳を出て奈良を立ち行く若葉かな
一本、立ちけり夏木立
窓の灯の梢にのぼる若葉かな
不二ひとつ埋み殘して若葉かな
絶頂の城たのもしき若葉かな
若葉して水白く麥黄ばみたり
山に添うて小舟漕ぎゆく若葉哉
蛯を截て渡る谷路の若葉かな
（右七句、句集）
金の間の人もの言はぬ若葉かな
やどり木の目を覺したる若葉哉
淺間山けぶりの中の若葉かな
峰の茶屋に壯士餉す若葉かな
出家して親王ます里の若葉かな
岸根行く帆はおろしたる若葉哉
（右六句、遺稿）
今はたゞ獨活も喰はれぬ若葉哉

若楓

茂山やさては家ある柿わか葉
高どのゝ灯影に沈む若葉かな
なちこちに瀧の音きく若葉かな
山畑を小雨晴れ行く若葉かな
盤若よむ庄司が宿の若葉かな
夜走りの帆に有明て若葉かな
谷路行く人はちひさき若葉かな
淺河の西し東す若葉かな
（右九句、後篇）
三井寺や日は午にせまる若楓（句集）
帷目にあやまつ足や若楓（遺稿）
若楓まづしき賤の掃さうじ
若楓學匠書に眼をさらす
（右二句、後篇）
箏の數の案内やおとしざし
筍や甥の法師の寺訪はん
（右二句、句集）
筍や柑を惜しむ垣の外（遺稿）
竹の子や五助畠の麥の中
箏や垣のあなたは不動堂

筍

若竹

掘り喰ふ我がたかうなの細き哉
竹の子を五本くれたる翁かな
（右四句、後篇）
若竹や橋本の遊女ありやなし
若竹や夕日の嵯峨となりにけり
（右二句、句集）
若竹や横雲のあちこちに見ゆ
若竹やあかつきの雨宵の雨
若竹や十日の雨の夜明かな
若竹や是非もなげなる蘆の中
若竹や村百軒の麥の音
（右五句、後篇）
いづこより礫うちけむ夏木立
酒十駄ゆりもて行くや夏木立
（右二句、句集）
かしこくも茶店出しけり夏木立
動く草もなくておそろし夏木立
とろゝ汲む音なし瀧や夏木立
花か實か水にちりこむ夏木立
（右四句、遺稿）

夏木立

魚くさき村に出でけり夏木立（後篇）
賣卜先生木の下闇に訪はれ顔（後篇）
山おろし早苗を撫でて行方かな（遺稿）
水古き深田に苗のみどりかな
獺の住む水も田に引く早苗かな
（右二句、後篇）
嵯峨の雅因が閑を訪れて
うは風に音なき麥を枕もと
長旅や駕なき村の麥埃
旅芝居穗麥がもとの鏡立
洛東のはせを庵にて目前のけしき
を申出で待る
蕎麥あしき京をかくして穗麥かな
狐火やいづこ河内の麥畠
大魯几董などと布引瀧見にまかり
かへるさ途中吟
春や穗麥が中の水車
（右六句、句集）
狐火や五助畠の麥の畠（遺稿）
卯の花のこぼるゝ露の廣葉哉（句集）

穗麥

木下闇

早苗

卯の花

卯の花や貴船の神女の練の袖
うの花や庵に寢に來る小商人
　金の扇に卯の花畫きたるに句せよ
　とのぞまれて
白がれの花さく井出の垣根かな
一本、卯の花も咲くや井出の里
（右三句、後篇）

柿の花

虫のために害なはれ落つ柿の花（句集）
澁柿の花散る里となりにけり
柿の花きのふ散りしは黃ばみ見ゆ
（右二句、後篇）

青梅

青梅に眉あつめたる美人かな
青梅を打てばかつ散る青葉かな
（右二句、句集）
青梅に打ち鳴らす商や貝のおと（遺稿）
青梅や微雨の中行く飯煙
青梅やさてこそ知りぬ豊後橋
青梅や棒心の人垣をへだつ
（右三句、後篇）

杜若

かきつばたべたりと蔦の垂れてける
宵々の雨に音なし杜若
（右二句、句集）
貧乏な御下屋敷や杜若　後篇）
牡丹散て打ちかさなりぬ二三片

牡丹

彼飜舌本吐紅蓮
閻王の口や牡丹を吐かんとす
寂として客の絶間のぼたん哉
地車のとゞろと響く牡丹かな
散りて後面影に立つぼたん哉
牡丹切て氣のおとろへしタ哉
山蟻のあからさまなり白牡丹
廣庭のぼたんや天の一方に
（右八句、句集）
虹を吐いて開かんとする牡丹哉
短夜の夜の間に咲ける牡丹かな
異草〻刈り捨てぬ家の牡丹かな
（右三句、遺稿）
日光の土にも彫れる牡丹かな
不動畫く宅磨が庭の牡丹かな
金屏の赫奕として牡丹かな

南蘋の牡丹の客や福西寺
ぼうたんやしろがれの猫こがれの蝶
牡丹ある寺行き過ぎしうらみ哉
やゝ二十日月も更け行く牡丹かな
方百里雨雲よせぬ牡丹かな
詠物の詩を口ずさむぼたんかな
山蟻の覆道作る牡丹かな

椎の花

蟻　垤
蟻王宮朱門をひらく牡丹かな
（右十一句、後篇）
富士の書贄
日枝の日をはたち重れて牡丹かな

芍藥

題學寮
芍藥に紙魚うち拂ふ窓の前（後篇）

柚の花

柚の花やゆかしき母屋の乾隅
柚の花やよき酒藏す塀の内
（右二句、後篇）

橘

たちばなのかはたれ時や古館（句集）
橘やむかしやかたの弓矢取（後篇）
述懷

椎の花人もすさめぬにほひ哉（句集）
魚赤たのふだる人の七回忌追福の
爲に知れるどちの發句を乞ひて手
向草となすも、則讃佛場の囚なる
べし

棕櫚

梢より放つ後光やしゆろの花　後篇）
米俟一周忌
やさしさよしきみ花咲く雨の中（後篇）

相

洛東芭蕉庵落成日
耳目肺腸こゝに玉卷く芭蕉庵（句集）

玉卷芭蕉

一本、芭蕉かな
けしの花離すべくもあらぬ哉（句集）

芥子の花

一八やしやがちゝに似てしやかの花（後篇）

一八

一本、兀山や

合歡の花

蝦の鮮も合歡の葉かげかな（句集）
虎雄が世を早うせしを悼む

花茨

雨の日やまだきにくれてねむの花（後篇）
かの東皐にのぼれば
花いばら故郷の道に似たるかな
路たえて香にせまり咲く茨かな

蓼

澤瀉　愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら
　（右三句、句集）
河骨　山吹の卯の花の後や花いばら（遺稿）
　しののめや雪見えなくに蓼の雨
ぬなは　砂川や或は蓼を流れ越す
　蓼の葉を此君と申せ雀鮓
　（右三句、句集）
百合　郷君のあかつき起や蓼の雨（後篇）
　おもだかは水のうらかく矢尻哉（後篇）
山梔子　河骨の二本咲くや雨の中（句集）
　採蓴を諷ふ彦根の倉夫かな（句集）
　ぬなはとる小舟に歌はなかりけり（後篇）
　かりそめに早百合生けたり谷の坊（句集）
畫顏　律院をのぞきて
夕顏　口なしの花咲く方や日に疎き（後篇）
　畫顏やこの道唐の三十里（句集）
　畫顏や町になりゆく杭の數（遺稿）
　夕顏や黄に咲きたるもあるべかり
　夕顏の花嚙む猫や餘所ごころ
　（右二句、句集）

夕顏や武士ひとこしの袞つゞき
夕顏や竹燒く寺のうすけぶり
　（右二句、遺稿）
瓜の花　夕顏や行燈さげし君は誰ぞ（後篇）
瓜　雷に小家を燒れて瓜の花（句集）
　青飯法師にはじめて逢けるに、舊識の如く語り合て
　水桶にうなづきあふや瓜茄子
　みちのくの吾友に草扉をたゝかれて
　葉がくれの枕さがせよ瓜ばたけ
藻の花　畫贊
　言葉おほく早瓜くるゝ女かな
　瓜小屋の月におはすや隱君子
　あだ花は雨にうたれて瓜畑
　（右五句、句集）
　兵どもに大將瓜をわかたれし（遺稿）
　藻の花や片われからの月もすむ
　路のべの刈藻花さく宵の雨
　（右二句、句集）

藻　蓮

題潮
藻の花や藤太が鐘の水はなれ（遺稿）
藻の花や小舟よせたる門の前（後篇）
　浪花の舊國あるじして諸國の俳士をあつめて圓山に會莚しける時
うき草を吹きあつめてや花むしろ（句集）
　五疊庵の主、河朔の飲をしたひ、居か洛東にうつす。左に榻を下せば鴨の川風に衣をふるひ、右に欄によれば白河の下流に足を濯ぐ。宗祇法師の、すさみにも住めば京なるその中に京に京ある住居なりけり。
浮草に花押しわけて月の宿（後篇）
　律院を覗さて
飛石も三つ四つ蓮の浮葉かな
蓮の香や水をはなるゝ莖二寸
吹殼の浮草にけぶる蓮見かな
白蓮を切らんとぞおもふ僧のさま
　座主のみこのあなかまとて、やをら立ち入り給ひける、いとたうとくて

釣しのぶ　羅（うすもの）に渡る蓮のにほひかな
　（右五句、句集）
病葉　佛印も古き甕（もたひ）や蓮の花
蓮池の田風にしらむ葉うら哉
戸を明けて蚊帳に蓮の主人かな
　（右三句、遺稿）
　あらたに居をトしたるに
釣しのぶ　蜩にさはらぬ住居哉（句集）
わくら葉に取りついて蟬のもぬけかな
わくら葉の梢あやよつ林檎かな
　（右二句、遺稿）

雜
慶子病後不二の夢見けるに申遣はす
降りかへて日枝を二十（はたち）の化粧かな
　馬南剃髮三本樹にて
脫ぎかゆる梢もせみの小河かな

秋之部

時候

秋來る

秋來ぬと合點させたるくさみかな（句集）

立秋

秋たつや何におどろく陰陽師

秋立つや素湯香しき施藥院

（右二句、句集）

初秋

照雨や我に秋立つ思ひあり（後篇）

今朝の秋

初秋や餘所の灯みゆる宵の程（句集）

貧乏に追ひつかれけり今朝の秋（句集）

温泉の底にわが足みゆる今朝の秋

今朝の秋朝精進のはじめかな

女郎花二もと折りぬ今朝の秋

硝子の魚おどろきぬ今朝の秋

團扇して燈消したりけさの秋

（右五句、遺稿）

病起

きぬ〴〵の詞すくなし今朝の秋

八朔

蝸ごしに鬼が笞つ今朝の秋

（右二句、後篇）

十六夜

八朔や扨明日よりは二日月（句集）

十六夜や鯨來そめし熊野浦（遺稿）

秋の日

行く舟や秋の日遠くなりまさる（後篇）

秋寒

三井の山上より三上山を望みて

秋寒し藤太が鎖ひゞく時（句集）

身にしむ

身にしむや横川のきぬをすます時

身にしむや亡妻の櫛を閨に踏む

（右二句、句集）

夜寒

山家

猿どのの夜寒訪ひゆく兎かな

壁隣ものことつかす夜寒かな

かけ〴〵て月もなくなる夜寒かな

起きて居てもう寢たといふ夜寒哉

夜を寒み小冠者臥したり北枕

（右五句、句集）

秋の夜

手燭してよき蒲團出す夜寒かな

巫女に狐憑する夜さむかな

書殺る師の鼻赤き夜寒かな

はなたれて獨り碁をうつ夜寒かな

一本、はなれにて

貧僧の佛をきざむ夜寒かな

（右五句、遺稿）

盜人の屋根に消えゆく夜寒かな（後篇）

きり〴〵す自在をのぼる夜寒かな

枕上秋の夜を守る刀かな

身の秋や今宵をしのぶ型もあり

（右二句、句集）

秋の夜の燈を呼ぶ越の筧かな

揮翰閑燈

住むかたの秋の夜遠く火影かな

秋の夜や古き書よむ奈良法師

（右三句、遺稿）

夜長

長き夜や通夜の連歌のこぼれ月

山鳥の枝踏みかゆる夜長かな

一本、踏みかえる長夜かな

（右二句、句集）

常燈の油尊き夜長かな（遺稿）

夜半の秋

長き夜や物うき官者と北枕（後篇）

丸山氏が黑き犬を書きたるに贊せよと望みければ

おのが身の闇より吼て夜半の秋

甲賀衆のしのびの賭や夜半の秋

子鼠のちゝよと鳴くや夜半の秋

（右三句、句集）

秋の暮

軒に寢る人追ふ聲や夜半の秋（後篇）

老懷

去年より又さびしいぞ秋の暮

父母の事のみ思ふ秋の暮

あちら向に鳴も立ちたり秋の暮

猿丸太夫贊

我がてに我をまれくや秋の暮

門を出れば我も行く人秋の暮

弓取に歌とはれけり秋のくれ

淋し身に杖わすれたり秋の暮

秋のくれ辻の地藏に油さす

（右八句、句集）

暮の秋

さびしさのうれしくもあり秋の暮
人は何に化るかもしらじ秋の暮
訓讀の經をよすがや秋のくれ
一人來て一人を訪ふや秋の暮
かぎりある命のひまや秋の暮
門を出て故人にあひぬ秋の暮
燈ともせといひつつ出るや秋の暮
鳥さしの西へ過けり秋の暮
（右八句、遺稿）

秋のくれ佛に化る狸かな（新花摘）

ある方にて

くれの秋有職の人は宿に在す
いさゝかなをひめ乞れぬ暮の秋
跡かくす師の行方やくれの秋
（右三句、句集）

行秋

行秋やよき衣きたり掛り人（句集）

秋惜しむ

戸をたゝく狸と秋を惜しみけり（遺稿）

洛東ばせを庵にて

冬近し

冬近し時雨の雲もこゝよりぞ（句集）

竹の春

おのが葉に月のおぼろなり竹の春

稲妻

天文

かな河浦にて

いな妻や八丈かけてきくたより
一本、きくたより
稲妻に一網打つやいせの海
いなづまや堅田泊りの宵の空
稲妻にこぼるる音や竹の翠
（右四句、句集）

いな妻や涙もてゆへる秋津しま

鎌倉にて

稲妻や二打三打劍澤
いなづまや秋津島根のかゝり船
稲妻や佐渡なつかしき船便り
（右四句、遺稿）

天の川

菊川に公卿乘泊りけり天の川（遺稿）

野分

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな
門前の老婆子薪食る野分かな
懿なる我が蕎麥存す野分かな

市人のよべ問かはす野分かな
客僧の二階下り來る野分かな
（右五句、句集）

船頭の棹とられたる野分かな
鴻の巣の網代にかゝる野分哉
一本、鴻の
野分して鼠のわたる潦
一本、流かな
曉の屋根に矢のたつ野分かな
まづ二つ瓦葺くもの野分かな
闕の灯をともせば滅る野分かな
西須磨を通る野分のあしたかな
妻も子も寺でもの喰ふ野分かな
恙なき帆柱寢かす野分かな
一本、寢せる
（右九句、遺稿）

岡の家の海より明けて野分かな
底のない桶こけあるく野分かな
棒ついて庄屋を見舞ふ野分かな
一本、庄屋どの見舞ふ

秋風

山賊のさとして過ぐる野分かな
（右四句、後篇）

かなしさや釣の糸吹く秋の風
一本、江渺々
秋の風書むしばまずなりにけり
金屏の羅は誰か秋の風
秋風や干魚かけたる濱庇
秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者
（右五句、句集）

おもひ出て鮓造る僧よ秋の風
秋風に散るや卒都婆の鉋屑
十六夜の雲吹きさりぬ秋の風
唐黍のおどろきやすし秋の風
（右四句、遺稿）

畫賛

秋風のふたゝび倒す障子かな（後篇）
硝やこれも鑛秋の風

秋の空

秋の空昨日や鶴を放ちたる（遺稿）

秋露

白露やさつ男の胸毛ぬるるほど
もののふの露はらひ行く弱かな

白露や茨の刺にひとつづゝ
狩倉の露におもたきうつぼかな
市人の物うち語る露の中
朝露やまだ霜知らぬ髪の落つ
（右六句、句集）
白露や家こぼちたる畳のうへ
鍋釜もゆかしき宿や今朝の露
舍利となる身の朝起や草の露
篠かけや露に聲あるかけはづし
旅人の火を打ちこぼす秋の露
かけ稲のそら解けしたり草の露
（右六句、遺稿）
殿原のいづち急ぐぞ草の露
白露の篠原へ出る檜原かな
狐の法師の化けたる畫に
白露の身や葛の葉の裏借家
所思
宗祇我を戀ふ夜眉毛に月の露を貫く
（右四句、後篇）
紅の露折りくべる御垣守

霧

朝露や村千軒の市の音
朝霧や杭打つ音丁々たり
（右二句、句集）
朝霧や畫にかく夢の人通り
霧はれて高砂の町まのあたり
人を取る灘はかしこか霧の海
一本、淵は――中
（右三句、遺稿）

初汐

初汐に追はれてのぼる小魚哉（句集）
初汐や朝日の中に伊豆相模（後篇）

三日の月

鳥霊てかくるゝ弓か三日の月

名月

名月にゐのころ捨る下部かな
名月や雨をためたる池の上
名月や兎の渡る諏訪の海
名月や夜は人住まぬ峰の茶屋
雨のいのりの音を思ひて
名月や神泉苑の魚躍る
（右五句、句集）
名月や露にぬれぬは露ばかり（遺稿）
名月や今朝見た人に行違ひ

名月や秋月殿の舟よそひ
（右二句、後篇）
仲麿の魂祭せむけふの月
かつまたの池は闇なりけふの月
花守は野守に劣るけふの月
（右三句、句集）
番屋ある村は更けたり今日の月
盗人の首領歌よむ今日の月
（右二句、遺稿）
櫻なき唐士かけて今日の月（後篇）
となせの瀧
水一筋月よりうつす桂河
良夜訪ふかたもなきに、訪ひ來る
人もなければ
中々にひとりあれぼぞ月を友
月天心貧しき町を通りけり
忠則古墳一樹の松に倚れり
月今宵松にかへたるやどりかな
探題雨月
旅人よ笠島かたれ雨の月

今日の月

月

月今宵あるじの翁舞ひ出でぬ
山の端や海を離るゝ月も今
庵の月主をとへば芋掘に
鯉長が醉るや、嵬峨として玉山の
まさに崩れんとするが如し。其俤
今なほ眼中に在りて
月見れば涙に碎く千々の玉
（右九句、句集）
五六升芋煮る坊の月夜かな
三井寺や月の詩作る踏落し
水の月やよ望に降る雪かとよ
（右三句、遺稿）
松島に月見ぬ人やうつせ貝
盃に月を碎くや夜もすがら
月今宵めくら突當り笑ひけり
（右三句、後篇）
興つきた雪にもこりず月を友
悼
秋の月古文臺に向ひしも
廣澤

後の月

水かれて池のひみづや後の月
山茶花の木の間見せけり後の月
泊る氣でひとり來ませり十三夜
十月の今宵はしぐれ後の月
十三夜の月を賞することは、我が日の本の風流なりけり
唐人に此花過ぎて後の月
（右五句、句集）

秋雨
後の月賢き人を訪ふ夜かな
後の月鳴たつあとの水の中
三井寺に緞子の夜着や後の月
（右三句、遺稿）

狄の霜
鰯煮る宿にとまりつ後の月（後篇）
秋雨や水底の草踏みわたる（句集）
秋雨や我が蓑笠はまだ濡らさじ（遺稿）
秋の霜うちひらめなる石の上（遺稿）

地理

秋の山
妙義山
立去る事一里眉毛に秋の峰寒し（句集）

秋の野
野路の秋我がうしろより人や來る（後篇）
秋の野や鳥うたんとてゆく袂
花野
松明消えて海すこし見ゆる花野哉（遺稿）
秋の水
田に落ちて田を落ち行くや秋の水（遺稿）

人事

七夕
梶の葉を朗詠集のしをり哉
戀さまゞ願の糸も白きより
（右二句、句集）

魂祭
あぢきなや蚊帳の裾踏む魂祭
魂棚をほどけばもとの座敷かな
（右二句、句集）
魂祭王孫いまだ歸り來ず
徹書記のゆかりの宿や魂祭
（右二句、遺稿）

燈籠
太祇が一週忌に
魂かへれ初裏の月のあるじなら（後篇）
送り火や今宵定むる嫁もあり
秋夜閑窓のもとに指を屈して世になき友を算ふ

燈籠を三たびかゝげぬ露ながら
高燈籠滅（きえ）なんとするあまたたび
（右二句、句集）
高燈籠總檢校は船の窓（遺稿）
穢多村に消え殘りたる切籠かな
しだり尾の切籠かけたり宵の秋
（右二句、後篇）

つと入
つと入（いり）や知る人に逢ふ拍子（へうし）ぬけ（句集）
つと入や納戸の暖簾ゆかしさよ
二三軒つと入しゆく旅の人
（右三句、遺稿）

花火
もの焚て花火に遠きかゞりかな
花火せよ淀の御茶屋の夕月夜
（右二句、句集）

大文字
花火見えて湊がましき家百戸（遺稿）
十六日の夕、加茂川のほとりにあそぶ
大文字や近江の空のたゞならぬ
相阿彌の宵髮起すや大文字
（右二句、句集）

月見
金閣に浪花の人や大文字（遺稿）
身の闇の頭巾も通る月見かな（句集）
月の宴秋津が聲の高きかな（遺稿）
梨の木に寄てわびしき月見かな
月見船きせるを落す淺瀬かな
（右二句、後篇）

駒迎
駒迎ことにゆゝしき額白（句集）
腹あしき僧も餅くへ城南神（後篇）

城南寺祭
地藏會
地藏會や近道をゆく祭り客（遺稿）

牛祭
角文字のいざ月もよし牛祭（句集）

撫待
撫待にきせる忘れて西へ行く（句集）
撫待や菩提樹蔭の片びさし
撫待へ寄らで過ぎ行く狂女かな
（右二句、遺稿）

待宵
まつ宵や女あるじに女客（遺稿）

秋蚊帳
秋の蚊帳主ばかりになりにけり（遺稿）

秋扇
狩衣の袖より捨る扇かな（遺稿）

虫賣
虫賣のかごとがましき朝寢かな（句集）

角力
春夜に句をとはれて
日頃中よくて耻あるすまひ哉

踊

一本、夜寒かな
飛入の力者あやしき角力かな
夕霧や伏見の角力ちり〳〵に
負まじき角力を寢ものがたりかな
（右四句、句集）
故里の坐頭に逢ひぬ角力取
よき角力出て來ぬ老の恨かな
夜角力の草にすだくや螽虫
訪ひよりし角力うれしき蟋居かな
角力取つげの小櫛をかりの宿
ちかづきの角力に逢ひぬ繡師
ふたつ三つよき名望まるすまふ取
（右七句、遺稿）
組あふて物うち語る地どりかな
あたまうつ家に歸るや相撲取
（右二句、後篇）
英一蝶が畫に贊望まれて
四五人に月落ちかゝるおどり哉
ひたと犬の啼く町越えて踊かな
粹のさそひ合せて踊かな

砧

（右三句、句集）
錦木の門をめぐりて踊かな
看病の耳に更け行く踊かな
あけかゝる踊も秋のあはれかな
（右三句、遺稿）
細腰の法師すゞろに踊りけり
猫は應擧がたはむれ也、杓子は蕪村が醉畫なり。
爺も婆も猫も杓子も踊かな
（右二句、後篇）
我則あるじして會儘しけるに
小路行けば近く聞ゆる砧かな
うき人に手をうたれたる砧かな
遠近をちこちとうつ砧かな
うき我に砧うて今は又止みぬ
石を打つ狐守る夜のきぬたかな
（右五句、句集）
この二日きぬた聞えぬ隣かな
貴人の岡に立ち聞くきぬたかな
枕にと砧よせたるたはれかな

なつかしき忍の里のきぬたかな
霧ふかき廣野に千々のきぬた哉
（右五句、遺稿）
迷ひ子を呼べば打ちやむ砧かな
秋惜しむ戸におとづるる砧かな
異夫の衣擣らん小家がち
旅人に我家知らるゝきぬたかな
聲遠き庄司がもとのきぬたかな
比叡に通ふ蘆の家のきぬたかな
（右六句、後篇）
山蔭や誰呼子鳥引板の音（句集）

鳴子

家ありや烟のつたふ鳴子縄
一本、かゞし縄
あなくるし水つきんとす引板の音
（右三句、後篇）
秋されや我が身ひとつの縄子引
我足にかうべぬかるゝ案山子かな

案山子

武者繪贅
御所柿にたのまれ貌のかゞし哉
姓名は何子か號は案山子かな

三輪の田に頭巾着て居るかゞし哉
雲裡坊、つくしへ旅立つとて、我に同行をすゝめけるに、えゆかざりければ
秋風のうごかして行くかゞしかな
水落ちて細脛高きかゞしかな
（右六句、句集）
畠ぬし案山子に逢て戻りけり
稻刈れば化をあらはすかゞしかな
花鳥の彩色のこすかゞしかな
折霜す秋に彳む案山子かな
錦する秋の野末のかゞしかな
笠とれば面目もなき案山子かな
（右六句、遺稿）
木曾殿の田に依然たるかゞしかな
人に似よと老の作れるかゞしかな
（右二句、後篇）
毛見の衆の舟さし下せ最上川（句集）

毛見衆

稻刈れば小草に秋の日のあたる

稻刈

一本、稻刈りて

したゝかに稲になびゆく法師かな
（右二句、遺稿）

新米

刈稲の神に仕ふや土の恩
新米の坂田は早し最上川（句集）
新米に假居の君のもどりかな
新米もまだ草の實の匂ひかな
熊野路や三日の粮の今年米
大高に君しろしめせ今年米
（右四句、後篇）

新酒

鬼貫や新酒の中の貧に處す（句集）
桝飲の價は取らぬ新酒かな（遺稿）

芋狩

几董と鳴瀧に遊ぶ
芋狩や頭を擧れば峯の月（句集）
芋狩や似雲が鍋の煮るうち（遺稿）

藥掘

德本の門も過たり藥掘
藥掘けふは蛇骨を得たりけり
（右二句、遺稿）

落し水

雨乞の小町が果や落し水
村々の寢ごころ更ぬ落し水
（右二句、句集）

足あとのなき田わびしや落し水
落し水柳に遠くなりにけり
（右二句、遺稿）

崩れ簗

落し水田毎の闇となりにけり（後篇）
たな橋はゆがみなりなり落し水
獨の月に啼く音やくづれやな（遺稿）

下り簗

行秋のところ〴〵や崩れやな（後篇）
しか〴〵と主訪ひ來ず下り簗（後篇）

鯊釣

はぜ釣の小舟漕ぐなる窓の前（句集）

綿摘

綿つみやたばこの花を見て休む（句集）
綿とりや犬を家路に追かへし
一本、追ひまはし

動物

鹿

雨中の鹿といふ題を得て
雨の鹿戀に朽ちぬは角ばかり
鹿寒し角も身に添ふ枯木かな
鹿ないてはゝその木末あれにけり
菜畠の霜夜は早し鹿の聲
三度啼て問えずなりぬ鹿の聲

殘照亭晩望
鹿ながら山影門に入日かな
ある山寺へ鹿聞にまかりけるに、茶を吸沙彌の夜すがら眠らでありたれば、晋子が狂句をおもひ出て
鹿の聲小坊主に角なかりけり
折あしく門こそ叩け鹿の聲
（右八句、句集）
櫻さへ紅葉しにけり鹿の聲
戀風はどこを吹いたぞ鹿の聲
卯の花の夕べにも似よ鹿の聲
小男鹿や僧都が軒も細柱
けもの三つ集めて發句せよといへるに
猪の狸寢入りや鹿の戀
鹿なくや宵の雨曉の月
立聞の心地こそすれ鹿の聲
山守の月夜野守の霜夜鹿の聲
窓の灯を山へな見せそ鹿の聲
（右九句、遺稿）

啄木鳥

秋の佛といふ題にて
鹿の聲下駄のあまりの佛かな
戀渡る鹿や伏猪の枕もと
（右二句、後篇）
手斧打つ音も木深し啄木鳥（後篇）

雁

探題雁字
一行の雁や端山に月を印す
紀の路にも下りず夜を行く雁一つ
（右二句、句集）
初雁に羽紋の紐を忘れけり
雁なくや舟に魚燒く琵琶湖上
（右二句、後篇）

渡り鳥

小鳥來る音うれしさよ板庇
渡り鳥こゝを瀬にせん寺林
渡り鳥雲の機手の錦かな
（右三句、句集）

百舌鳥

此森もとかく過ぎけり鵙おとし（句集）
草莖を失ふ百舌鳥の高音かな（後篇）

鳴

竹溪法師丹後へ下るに
立つ鳴に眠る鳴ありふた法師

鶉　鳴立つて秋天ひくき眺めかな
　（右二句、句集）
鴫　鳴遠く鍬すく水のうねりかな（後篇）
山雀　小百姓鶉を取る老となりにけり（句集）
河鹿　鶉のこぼし去ぬる實のあかさ（遺稿）
　山雀や榧の老木に寢に戻る（句集）
　かじか啼く袖なつかしき火打石
　加茂川のかじかは知らず都人
　（右二句、遺稿）
鱸　百日の鯉切盡て鱸かな
　釣上げし鱸の亘口玉や吐く
　（右二句、句集）
落鮎　鱸得てうしろめたさよ涙の月（遺稿）
　　遲日亭句會
　鮎落て宮木とゞまる麓かな
　　宇治行
　鮎落ていよ〳〵高き尾上かな
　（右二句、遺稿）
江鮭　瀬田降て志賀の夕日や江鮭（句集）
蜻蛉　日は斜瞰屋の鉛にとんぼかな（句集）

秋の蚊　染めあへぬ尾のゆかしさよ赤蜻蛉（遺稿）
　蜻蛉やいつまでたゝぬ玉かしは
　秋の蚊の人を尋ぬるこゝろ哉（遺稿）
虫　虫なくや河内通ひの小提灯（句集）
蓑虫　みの虫や秋ひだるしと啼くなめり（句集）
　みの虫や笠置の寺の龕衆の中（遺稿）
蟬　蟬や相如が弦の切るゝ時（遺稿）

植物

朝顔　潤水湛如藍
　朝顔や一輪深き淵のいろ
　朝顔や手拭のはしの藍をかころ
　（右二句、句集）
萩　小狐の何にむせむけむ小萩はら
　薄見つ萩やなからむ此ほとり
　白萩を春わかちとるちぎり哉
　（右三句、句集）
　黄昏や萩に鹿の高臺寺
　うき旅や萩の枝末の雨をふむ
　岡の家に畫むしろ織るや萩の花

　萩にくれて玉田横野へわかれ行く
　（右四句、遺稿）
桔梗　桔梗も見ゆる花屋が持佛堂（句集）
女郎花　修行者の徑にめづる桔梗哉（遺稿）
　女郎花そも莖ながら花ながら
　里人はさとも思はじ女郎花
　猪の露折りかけて女郎花
　（右三句、句集）
鶏頭　とかくして一把になりぬ女郎花（遺稿）
　一本、一夜に折れぬ
　錦木は吹きたふされて鶏頭花（句集）
　鶏頭の根にむつまじき箒かな
　鶏頭の花のはちするいつまでも
　（右二句、後篇）
蘭　夜の蘭香にかくれて花白し
　蘭夕狐のくれし奇楠を炷む
　（右二句、句集）
　この蘭や五助畠に昨日まで
　蘭の香や菊より暗きほとりより
　（右二句、遺稿）

木槿　朝顔にうすきゆかりの木槿かな（句集）
　修理寮の雨にくれゆく木槿かな（遺稿）
水芙蓉　桐の葉はおち盡すなるを木芙蓉（遺稿）
芙蓉　日を帶びて芙蓉傾く恨みかな
柿　春や老木の柿を五六升（遺稿）
　澁柿ややがて紙子の歸り花（後篇）
銀杏　稚子の寺なつかしむいてふかな（句集）
　いてふ踏んで靜かに兒の下山哉（遺稿）
芭蕉　物書に葉うらにめづる芭蕉かな（句集）
菊　日でりどし伏水の小菊貰ひけり
　山家の菊見にまかりけるに、ある
　じの翁、紙硯をとうでて、ほ句も
　とめければ
　菊の露受けて硯のいのちかな
　いでさらば投壺まゐらせん菊の花
　　菊に古笠を覆たる畫に
　白菊や吳山の雪を笠の下
　手燭して色失へる黄菊かな
　村百戸菊なき門も見えぬかな
　あさましき桃の落葉よ菊畠

芒　野

菊

菊作り汝は菊の奴かな
（右八句、句集）
ほき〳〵と二本手折る黄菊かな
長櫃にうつ〳〵たる菊の香かな
白菊や庭にあまりて畠まで
二本づつ菊まゐらする佛だち
一本、菊まゐらせん
（右四句、遺稿）
白菊やかゝる目出度色はなくて
西の京に宿もとめけり菊の時
（右二句、後篇）
けふ句ふ觀世が辻の菊の花
なつかしき紫苑がもとの野菊哉（句集）
小狐のかくれ顔なる野菊かな（後篇）
山は暮れて野は黄昏のすゝきかな
永西法師はさうなきすきものなり
し、世を去りて二歳になりければ
秋ふたつ憂きをますほのすゝきかな
垣根潜る薄ひともと眞蘇枋なる
（右三句、句集）

花芒

曼珠沙華

葛

蓼

地下りに暮れ行く野邊のすゝきかな
追風にすゝき刈り取る翁かな
（右二句、遺稿）
太祇十三回忌
線香やますほの芒二三本（後篇）
辨慶賀
花すゝきひと夜はなびけ武藏坊（句集）
花すゝき刈殘すことはあらなくに（遺稿）
油斷して嵐にあふな花すゝき（後篇）
まんじゅしやげ蘭にたぐひて狐啼（遺稿）
葛の棚葉繁く軒端か覆ひければ、
蓋さへいと暗きに
葛の葉のうらみ貌なる細雨かな（句集）
天狗風のこらす葛のうら葉かな（遺稿）
三徑の十歩に盡きて蓼の花
甲斐が根や穂蓼の上を驟車
（右二句、句集）
下露の小萩がもとや蓼の花
黄に咲くは何の花ぞも蓼の中
蓼の穂を眞壺に藏す法師かな

萩　蘆　蕎麥

（右三句、遺稿）
萩の風いとさう〳〵しき男かな（遺稿）
二見形文壺の賛
此器は祖翁のこのみにして、殊
に筆久しくて千々の心はこめら
れけめ。
濱萩に寄せては浪の筆かへし（後篇）
蘆の花漁翁が宿のけぶり飛ぶ（遺稿）
蘆の穂に沖の早風のあまりかな（後篇）
故郷や酒はあしくも蕎麥の花
宮城野の萩更科の蕎麥にいづれ
道のべや手よりこぼれて蕎麥の花
落る日のくゝりて染る蕎麥の莖
題白川
黒谷の隣はしろし蕎麥の花
（右五句、句集）
蕎麥刈て居るや我がゆく道のはた
根に歸る花や吉野の蕎麥畠
柿の葉の遠くちりきぬ蕎麥畠
（右三句、遺稿）

椎

栗　唐黍　煙草　唐辛子

鬼茸　灯

一つ家のかしこ類なりそばの花
幻住庵に曉臺が旅寢せしを訪ひて
丸盆の椎にむかしの音聞かむ
椎拾ふ横河の兒のいとまかな
（右二句、句集）
栗備ふ惠心の作の彌陀佛（句集）
古寺に唐黍を焚く暮日哉（遺稿）
むしばみて下葉ゆかしきたばこかな（句集）
探題
餉にからき涙やとうがらし
俵して藏め蓄へぬ唐辛子
錦木を立てぬ垣根やとうがらし
（右三句、句集）
御園守の翁が庭やとうがらし
うつくしや野分のあとのとうがらし
（右二句、遺稿）
氣短かに秋を見せけりとうがらし（後篇）
鬼灯や清原の女が生寫し（句集）
心にくき茸山越る旅路かな
宇治行

松露　君見よや拾遺の芋の露五本

（右二句、後篇）

零餘子　茯苓は伏しかくれ松露は現はれぬ（句集）

紅葉　うれしさの箕にあまりたるむかご哉（句集）

高雄

西行の夜具も出てある紅葉かな

ひつぢ田に紅葉ちりかゝる夕日かな

谷水の盡きてこがるるもみぢかな

よらで過る藤澤寺のもみぢかな

むら紅葉會津商人なつかしき

（右五句、句集）

黄に染みし梢を山のたゝずまゐ

折り得たる紅葉さてしも横ひらき

一本、横ひらた

このもよりかのも色よき紅葉かな

山暮れて紅葉の朱を奪ひけり

紅葉見の岩に水取弱かな

紅葉見や用意かしこき傘二本

（右六句、遺稿）

立圖が口質に倣ふ

稲穂　初紅葉お染といはゞ龍田山

紅葉してそれも散り行く櫻かな

打かへり見れば紅葉す葛の裏

出家して親王ます里の紅葉かな

紅葉して寺あるさまの梢かな

枯枝に鼈龍を見たり蔦紅葉

茂山やさては家あり柿紅葉

（右七句、後篇）

小原女の足の早さよ夕もみぢ

花紅葉終にしほ木の夕煙

斗文父の八十の賀を壽くに申贈る

稻かけて風もひかさじ老の松（句集）

掛稻に鼠なくなる門田かな（遺稿）

落穂拾ひ日あたる方へ歩み行く（句集）

中々に落穂拾はすや尉と姥（遺稿）

油買うて戻る家路の落穂かな（後篇）

順禮の目鼻書きゆくふくべ哉

腹の中へ齒はぬけけらし種ふくべ

四十に滿たずして死なんこそめやすけれ

散る柳　あだ花にかゝる恥なし種ふくべ

破蓮　人の世に尻を据えたるふくべ哉

梅もどき　（右四句、句集）

薬に蔓にいとはれ頸や種ふくべ（遺稿）

遊行柳のもとにて

柳散清水涸石處々（句集）

されば こそ賢者は富まず敗蓮（遺稿）

折りくるゝ心こぼさじ梅もどき

梅もどき折るや念球をかけながら

（右二句、句集）

鵜のうたゝ來啼くや梅もどき

梅もどき鳥ゐさせじと端居かな

柿崎の小寺尊し梅もどき

（右三句、句集）

末枯　うら枯やからき目見つる漆の樹（句集）

うら枯や家をめぐりて醍醐道

うら枯の中に道ある照葉かな

（右二句、後篇）

雜

芙老芒　故人に別る

木曾路行ていざ年よらん秋一人

古人移竹をおもふ

去來去り移竹移りぬいく秋ぞ

ひとり大原野のほとり吟行しけるに、田囎荒蕪して千草の下葉霜をしのぎ、つれなき秋の日影をたのみて僅かに花の咲き出でたるなど殊にあはれ深し。

水かれ〳〵蓼かあらぬか蕎麥か否か

秋の燈やゆかしき奈良の道具市

追剝を弟子に剃りけり秋の旅

須磨寺にて

笛の音に波も寄り來る須磨の秋

秋はものの蕎麥の不作もなつかしき

（右八句、句集）

秋たま〳〵つゝじ花咲く志賀の里

打ちよりて後住ほしがる寺の秋

（右二句、遺稿）

宇治行
白居易が琵琶の妙音を比喩せる

冬之部

時候

神無月

宗任に水仙見せよ神無月（句集）

小春

うかぶ瀬に遊びて、昔柏莚が此所にての發句を思ひ出て、其風調に倣ふ

小春風眞帆も七合五勺哉（句集）

初冬

初冬や日和になりし京はづれ（句集）

初冬や香花いとなむ穢多が宿

初冬や訪はんと思ふ人來り

（右二句、後篇）

今朝の冬

百姓に花瓶賣りけり今朝の冬（後篇）

冬至

新右衞門蛇足を誘ふ冬至かな

書記典主故國に遊ぶ冬至かな

（右二句、句集）

夜半の冬

獨唱なおもひ出でて帛（きぬ）をさく琵琶の流や秋の聲（後篇）

寒夜

貧乏な儒者訪ひ來る冬至かな（遺稿）

霜夜

鋸の音貧しさよ夜半の冬

飛驒山の質屋とざしぬ夜半の冬

（右二句、句集）

貧居八詠（の七）

我を厭ふ隣家寒夜に鍋を鳴らす（句集）

寒さ

鑪老聲餓て鼠檐をはみこぼす（後篇）

我が骨の滿國にさはる霜夜かな（遺稿）

火魯が病の復常を祈る

痩脛や病より起つ鶴寒し

故人曉臺、余が寒爐を訪はずして歸鄉す。知是東山西野に吟行して荏苒として晦朔の伐謝を知らず。歸期の迫りたるをいかむともせざるなるべし。

牙寒き粱の月の鼠かな

易水（えきすい）にねぶか深るる寒さかな

皿を踏む鼠の音のさむさかな

寺寒く檐はみこぼす寒さかな

（右五句、句集）

眞金はむ鼠の牙の音寒し

一本、鐵をはむ——寒さかな

雪舟の不二雪信が佐野いづれか寒き

水鳥も見えぬ江わたる寒さかな

（右三句、遺稿）

借り具足（ぐそく）われになじまぬ寒さかな

井のもとへ薄刄を落す寒さかな

（右二句、後篇）

冬されや

冬されや小鳥のあさる韮畠（句集）

師走

鶯のなくや師走の羅生門（句集）

炭賣に日のくれかゝる師走かな（遺稿）

蜉蝣ひとつ障子に羽うつ師走かな（後篇）

年の暮

題　杳

石公へ五百目もどす年の暮

笠着て草鞋はきながら

芭蕉去つてその後未だ年暮れず

（右二句、句集）

土器賣贄

面影もかはらけ〳〵年の暮

電の戸棚もあるや年の暮

（右二句、後篇）

行年

ゆく年の瀨田を廻るや金飛脚（句集）

行年のめざまし草や茶釜賣（遺稿）

行年の女歌舞伎や夜の梅（後篇）

大年夜除

近江路や軒端によする年の波

いざや寢ん元旦はまた明日（あす）のこと（遺稿）

天文

初時雨

蓑虫の得たりかしこし初時雨

初時雨眉に烏帽子の雫かな

（右二句、句集）

時雨

絕々の雲しのびすよ初時雨（遺稿）

楠の根を靜かにぬらす時雨かな

時雨るゝや蓑買ふ人のまことより

しぐるるや鼠の渡る琴の上

古傘の婆娑と月夜の時雨かな
しぐるゝや我も古人の夜に似たる
夕時雨蓑ひそみ音に愁ふかな
　涙花遊行寺にて芭蕉忌を營みける
　二柳庵に
蓑笠の衣鉢つたへて時雨かな
（右七句、句集）
蓑虫のふらと世にふる時雨かな
水際もなくて古江のしぐれ哉
榎しぐれて淺間の煙餘所に立つ
目前を昔に見するしぐれかな
釣人の情のこはさよ夕しぐれ
化さうな傘貸す寺のしぐれかな
鷺ぬれて鷗に日のさす時雨かな
禪林の廊下うれしき時雨かな
一本、禪寺の――たのしめ北時雨
海棠の花は咲かずや夕時雨
　題朝時雨
雲のひまに夜は明て尙しぐれかな
子を結ぶ竹に日暮るる時雨かな

しぐるるや長田が館の風呂時分
もの負て堅田へ歸るしぐれかな
蓮枯れて池あさましき時雨かな
半江の斜日片雲の時雨かな
（右十五句、遺稿）
一渡しおくれて人にしぐれかな
又嘘を月夜に釜のしぐれかな
窓の灯の佐田はまだ寢ぬ時雨かな
朔日の城かしましき時雨かな
鷺の竹に來そめししぐれかな
時雨るるや用意かしこき傘二本
鹽わかる上をからくも行く時雨
　虹竹に手向侍る
來迎の雲をはなれて時雨かな
　芭蕉忌
時雨おとなくて苔に昔をしのぶ哉
（右九句、後篇）
下戸ならぬこそ宵々の時雨かな
子を遣ふ狸もあらむ小夜時雨
さかばやし軒に年ふる時雨かな

大魯が兵庫の隱栖を几董と共に訪ひて、人々と海邊を吟行しけるに
木枯に鰓吹るるや釣の魚
こがらしやひたとつまづく戻り馬
こがらしや畠の小石目に見ゆる
一本、畑にちひさき石も見え
木枯や何に世渡る家五軒
凩やこの頃までは萩の風
こがらしや鐘に小石を吹きあてる
こがらしや岩に裂け行く水の聲
（右七句、句集）
こがらしや廣野にどうと吹起る
こがらしや野河の石を踏み渡る
凩やのぞいて逃る淵のいろ
（右三句、遺稿）
木枯や小石のうける板廂（後篇）
凩や釘の頭を戸に怒る
木枯や炭賣一人わたし舟
　郊外
靜かなるかしの木原や冬の月（句集）

石となる撞の梢や冬の月（遺稿）
　感偶
寒月や門なき寺の天高し
寒月や鰐岩のあからさま
寒月や枯木の中の竹三竿
寒月や衆徒の群議の過ぎて後
（右四句、句集）
寒月や門を叩けば沓の音
寒月に木を割る寺の男かな
寒月や小石のさはる沓の底
（右三句、遺稿）
寒月や開山堂の木の間より
寒月や僧に行逢ふ橋の上
（右二句、後篇）

初霜やわづらふ鶴を遠く見る（遺稿）
たんぽゝの忘れ花あり路の霜
　晋子三十三回
擂盆のみそみめぐりや寺の霜
朝霜や劍を握るつるべ繩
　几董と涙菴より歸さ

霰

霜百里舟中に我月を領す
霜あれて韮を刈取る翁かな
（右五句、句集）
野の馬の韮をはみ折る霜の朝
松明振りて船橋わたる夜の霜
（右二句、遺稿）
鷺や何こそつかす藪の霜
衛士の火もしら〳〵霜の夜明哉
古池に草履沈みてみぞれかな（句集）
一しきり矢種の盡るあられかな
玉あられ漂母が鍋をみだれうつ
（右二句、句集）
玉あられうけるや富士の手邊より
深草の笠しのばれぬあられかな
一本、しぐれかな
初雪の出來そこなうて霰かな
（右三句、後篇）

初雪

はつ雪の消ゆればぞ又草の露
初雪の底を叩けば竹の月
（右二句、句集）

雪

はつ雪や上京の人よかりけり（後篇）
題七歩詩
雪折や雪を湯に焚く釜の下
雪の暮鴫はもどつて居るやうな
埋み火や我がかくれ家も雪の中
鍋さげて淀の小橋を雪の人
雪白し加茂の氏人馬で打て
雪折や吉野の夢のさめる時
漁家寒し酒に頭の雪を燒く
宿かさぬ火影や雪の家つゞき
貧屋八詠（の一）
愚に耐よと窓を暗くす雪の竹
（右九句、句集）
大雪となりけり關の戸さし時
大雪や上客歩行ていりおはす
雪省をはかんとすれば鼠ゆく
雪國や粗たのもしき小家がち
懇な飛脚過ぎ行く深雪かな
雪の戸に格あて行く木履かな
雪の且母家のけぶりめでたさよ
雨の時貧しき蓑の雪に富めり
雪折もきこえて暗き夜なりけり
木屋町の旅人とはん雪の朝
住吉の雪にぬかづく遊女かな
邯鄲の市に饅見る雪の朝
嵐雪にふとん着せたり雪の宿
樂書の壁をあばれむ今朝の雪
繋ぎ馬雪一双のあぶみ哉
（右十五句、遺稿）
焚火して鬼こもるらし夜の雪
いさり火の燒のこしけり嚴の雪
一二寸降りもてゆくや雪千里
烈々と雪に秋葉の焚火かな
山里や雪にかしこき臼の音
忠則墓
月と雪松にかへたき宿かな
（右六句、後篇）
古道と聞えてゆかしき雪野かな
風呂入に谷へ下るや雪の笠
水と鳥の共語りや雪の友

吹雪

宿かせと刀投げ出す吹雪かな（句集）
一本、宿貸に

年の雪

年ひとつ積るや雪の小町寺（句集）

地理

冬の山

めぐり來る雨に音なし冬の山
春夜樓會

枯野

むささびの小鳥はみをる枯野かな
大德の糞ひりおはす枯野かな
子を捨る藪さへなくて枯野かな
息杖に石の火を見る枯野かな
馬の尾に茨のかゝる枯野かな
薊條として石に日の入る枯野かな
（右六句、句集）
三日月も罠にかゝりて枯野かな
畠にもならで悲しき枯野かな
石に詩を題して過る枯野かな
（右三句、遺稿）
山を越す人に別れの枯野かな
てら〳〵と石に日のてる枯野かな

（右二句、後篇）
まつすぐに道現はれて枯野かな

冬川

冬川や佛の花の流れ來る
冬川や孤村の犬の獺を追ふ
（右二句、遺稿）
冬川や誰が引き棄てし赤蕪

氷

霍英は一向宗にて信深きをのこなりけり。愛子を失ひて悲しみに堪へず、朝暮佛につかうまつりて、
讀經おこたらざりければ
蠟燭の涙氷るや夜の鶴
貧居八詠（の五）
氷る灯の油うかゞふ鼠かな
貧居八詠（の八）
商あらはに筆の氷をかむ夜かな
山水の減る程減りて氷かな
（以上四句、句集）
文机の肱も氷のひゞきかな（遺稿）
眞夜中や氷の上の捨小舟（後篇）
氷踏て夙に驗者の木履かな

人事

冬籠

居眠りて我に隱れん冬籠
冬ごもり壁を心の山に倚る
冬ごもり燈下に書すと書れたり
勝手まで誰が妻子ぞ冬ごもり
冬ごもり佛にうとき心かな
（右五句、句集）
冬ごもり心の奥のよしの山
鍋敷に山家集あり冬ごもり
冬ごもり妻にも子にもかくれん坊
松島で死ぬ人もあり冬ごもり
桃源のみちの細さよ冬ごもり
寶喰の調度殘りて冬ごもり
信濃なる下男おきけり冬ごもり
冬籠母屋へ十歩の緣傳ひ
（右八句、遺稿）
屋根低き宿うれしさよ冬ごもり
禁足のはじめなりけり冬ごもり
冬ごもり燈光氣の眼を射る

戸の犬の寢かへる音や冬ごもり
（右四句、後篇）
茶畠に細道をつけて冬ごもり
茶の花の月夜も知らず冬籠

爐開

爐開や雪中庵の霰酒（句集）
爐開や裏町かけて角やしき（遺稿）
爐開やまづありつきし母の顔（後篇）

炬燵

讃州高松にしばらく旅籠りしけるに、あるじ夫婦の隔なき志の嬉しさに、けふや其家を立出づるとて
炬燵出てはや足もとの野河かな
腰ぬけの妻うつくしき炬燵かな
（右二句、句集）
いんで來る人むつかしき炬燵かな
宿かへて炬燵うれしき在どころ
（右二句、後篇）

火桶

老女の火をふき居る畫に
小野の炭匂ふ火桶のあなめかな
われぬべき年もありしを古火桶
器に置て心に遠き火桶かな

炭

炭團法師火桶の穴より窺ひけり
貧居八詠（の六）
炭取のひさご火桶に並び居る
（右五句、句集）

埋火

畫賛
火桶炭團を喰ふこと夜毎々々に一つづつ
（右、遺稿）
埋火や終には煮る鍋のもの（句集）
埋火やものそこなはぬ比丘比丘尼
埋火や春に消え行く夜やいくつ
埋火も我が名をかくすよすがかな
（右三句、遺稿）
埋火のありとは見えて悲の側（後篇）
炭賣に鐘見せたる女かな（遺稿）
一本、炭燒に
悼文霞
白炭の骨にひびくや後夜の鐘（遺稿）
庵買て且うれしさよ炭五俵
炭俵ますほの芒見つけたり
炭竈にたちよる花のあるじかな

炭竈のほとりしづけき木立かな
（右四句、後篇）

蒲團

東山の麓に住むところを卜したる
一音法師に申遣はす
嵐雪とふとん引合ふ侘寢かな
いばりせし蒲團干したり須磨の里
古里にひと夜は更るふとんかな
大兵のかり寢あはれむふとんかな
虎の尾を踏みゝつ裾にふとんかな
（右五句、遺稿）
よき蒲團宗祇とめたる蟇しさよ
孝行な小僧等にふとん一つづつ
（右二句、遺稿）
都人に足らぬふとんや峯の寺
唐草の牡丹めでたきふとん哉
（右三句、後篇）
かしらべやかけん裾べや古衾

衾

沙彌律師ころり〳〵とふすまかな
貧居八詠（の四）
紙ぶすま折目正しくあはれなり
（右三句、句集）
鬼王の妻に後れしふすまかな
糞ひとつ鼠のこぼすふすまかな
（右二句、遺稿）

頭巾

町はづれいでや頭巾は小風呂敷
引かふて耳をあはれむ頭巾かな
みどり子の頭巾眉深きいとをしみ
我頭巾うき世のさまに似ずもがな
さゞめごと頭巾にかづく羽織かな
頭巾着て靡こもりくの初瀬法師
（右六句、句集）
闇の夜に頭巾を落す憂身がな
路地の闇親子除合ふ頭巾かな
眇なる醫師わびしき頭巾かな
（右三句、遺稿）
紫の一間ほのめく頭巾かな
頭巾二つ一つは人にまゐうせん
（右二句、後篇）

紙子

めし粒で紙子の破れふたぎけり
此冬や紙衣着ようと思ひけり

老を山へ捨てし世もあるに紙子かな
（右三句、句集）
宿老の紙衣の肩や朱陳村（遺稿）
紙子着て用そこ〳〵に歩行けり
實盛が紙子は夜のにしきかな
（右二句、後篇）

毛衣

冬やことしよき裘得たりけり（遺稿）
一本、けさの冬

足袋

足袋はいて寢る夜ものうき夢見哉（句集）
眞結びの足袋はしたなき給仕かな（後篇）

麥蒔

麥蒔や百まで生きる顏ばかり（句集）
麥蒔の魁頭長き夕日かな（遺稿）

綿代

鳥鳴て水音くるゝ綿代かな（後篇）

十夜

あなたふと茶もだぶ〳〵と十夜かな（句集）
沐火の人に親しき十夜かな（後篇）

夜興引

夜興引や犬のとがむる塀の内（句集）
夜興引の袂佗しきはした錢（遺稿）

鉢叩

鳴らし來て我夜あはれめ鉢叩
一瓢のいんで寢よやれ鉢たゝき
木のはしの坊主のはしや鉢たゝき
夕顏のそれは髑髏鉢たゝき
花に表太雪に君あり鉢たゝき
西念はもう寢た里か鉢たゝき
（右六句、句集）
終に夜を家路にかへる鉢たゝき
子を寢せて出で行く闇や鉢たゝき
墨染の夜の錦や鉢たゝき
（右三句、遺稿）
守信と瓢にかけよ鉢たゝき
夜泣する小家も過ぎぬ鉢たゝき
鉢たゝきこれらや夜の都なる
（右三句、後篇）

寒念佛

細道になり行く靡や寒念佛
極樂の近道いくつ寒念佛
（右二句、句集）
提灯の猶あはれなり寒念佛（後篇）

寒垢離

寒ごりや上の町まで來たりけり
一本、寒ごりは

寒こりやいざまゐりそふ一手桶
（右二句、句集）

寒こりに尻を向けたる繋ぎ馬（遺稿）

寒聲や古うた謡ふ誰が子ぞ（句集）

御火焚や霜うつくしき京の町

御火焚や犬も中々そゞろ顔
（右二句、句集）

題　懸

顔見世や夜着をはなるゝ妹が許

かほみせや既に浮世の飯時分

かの曉の霜に跡つけたる晉子が信

に背きて嵐雪が懶に倣ふ

顔見世やふとんをまくる東山
（右三句、句集）

旅立つや顔見世の灯も見ゆるなり（遺稿）

凡童に誘はれて岡崎なる下村氏の

別業に遊びて

口切や五山衆なんどほのめきて

口切や小城下ながら只ならぬ
（右二句、句集）

口切の隣も飯のけぶりかな

口切や梢ゆかしき塀隣

口切や北にも召れて四疊半
（右三句、遺稿）

口切や湯氣たゞならぬ臺所（後篇）

朝霜や室の揚屋の納豆汁

入道のよゝとまゐりぬ納豆汁
（右二句、句集）

貧居八詠（の三）

我のみの柴折りくべるそば湯かな（句集）

しづ〳〵と五徳据えけり藥喰

藥喰隣の亭主箸持參

くすり喰人に語るな鹿が谷

妻や子の寢顔も見えつ藥喰

客僧の狸寢入や藥ぐひ
（右五句、句集）

袿衣の妻もこもれり藥喰（遺稿）

藥喰盧生を起す小犀かな（後篇）

饅汁の宿赤々とともしけり

ふぐ汁の我活きて居る寢覺かな

秋風の吳人は知らじふぐと汁

雪なせそ叩くは僧よ饅と汁

河豚の面世上の人をにらむかな

もたひうつて饅になき世の友とはむ

袴着て饅喰うて居る町人よ
（右七句、句集）

玉川の歌口ずさむ饅の友

ふぐ汁の亭主と見えて上座かな

汁の贅先生文を抑はれたり

海のなき京おそろしやふぐと汁

一本、都はこはし

ふぐ汁の君よ我等よ子期伯牙

河豚汁や王侯の家の戻り足

河豚汁やおのれ等が夜は臘なる

逢はぬ戀思ひ切る夜や河豚と汁

その昔鎌倉殿や河豚やなき

望月のその如月に饅はなし

ふぐと汁鼎に伽羅を焚く夜かな
（右十一句、遺稿）

雪の饅鮟鱇の上に立たんとす

河豚くへと乳母は育てぬ恨みかな

妹が子は河豚くふ程になりにけり
（右三句、後篇）

いざ雪見容す蓑と笠（句集）

節季候來たり裏白表白

節季候面つゝまれぬ小風呂敷
（右二句、後篇）

煤拂や調度少なき人は誰（遺稿）

おとろへや小枝も捨ぬ年木樵（句集）

樵捨るとし木の枝に雀かな（遺稿）

御經に似てゆかしさよ古暦（句集）

櫻木の板もやかれて古暦

閻の夜に終る暦の表紙かな
（右二句、遺稿）

柊さす果じや外の濱びさし（遺稿）

たから舟慶子が筆のすさびかな（後篇）

とし守る夜老は尊く見られけり

とし守や乾鮭の太刀鱈の棒
（右二句、句集）

春泥會に遊びて

靈運も今宵は許せ年忘れ
錦木の立聞もなき雑魚寝かな
（右二句、句集）
小僧等に法問させて年忘（後篇）

動物

狐火

狐火や髑髏に雨のたまる夜に（句集）

冬鶯

冬鶯むかし王維が垣根かな

鴨

佐保川に鴨の毛捨るゆふべかな
鴨遠く鍬そゝぐ水のうねりかな
鍬洗ふ水のうねりや鴨一羽
（右三句、遺稿）

鴛鴦

海士の家の鴛にしらむ夕べかな
里過ぎて古江に鴛鴦を見つけたり（句集）
なし島や國師の沓もにしき革
なし島や花の君子はかれて後
（右二句、遺稿）
をし鳥や鵜の覗く池古し（後篇）

水鳥

水鳥や百姓ながら弓矢取
水鳥や舟に菜を洗ふ女あり
水鳥や枯木の中に鶯二挺
（右三句、句集）
水鳥や提灯一つ城を出る
水鳥や夕日江に入る垣のひま
水鳥や亘椋の舟に木綿賣
（以上三句、遺稿）
水鳥の居所替る凍かな
水鳥や朝めし早き小家がち
風一陣水鳥白く見ゆるかな
水鳥を吹きあつめたり山颪
水鳥や提灯遠き西の京
（右五句、後篇）

千鳥

一條もどり橋のもとに柳風呂といふ娼家あり。ある夜、太祇とともに此樓にのぼりて
羽織着て綱もきく夜や川千鳥
風雲の夜すがら月の千鳥かな
磯千鳥足をぬらして遊びけり
打ちよする涙や千鳥の横歩き
加茂人の火を燈る音や小夜千鳥

（右五句、句集）
浦千鳥草も木もなき雨夜かな
渡し呼ぶ女の聲や小夜千鳥
（右二句、遺稿）
湯あがりの舳先にたつや村千鳥
便船のこたへつれなき千鳥かな
むら雨に音ゆき違ふ千鳥かな
（右三句、後篇）

都鳥

鳥山や夜着の裾より朝千鳥
泰里が東武に歸を送る
嵯峨寒しいざ先くだれ都鳥

寒苦鳥

貧居八詠（の二）
かんこ鳥は賢にして賤し寒苦鳥

鯨

几董判句合
鯨賣市に刀を鼓しけり（句集）
山颪一二の鉤ののぼりかな
手取にやせんと乗り出す鯨舟
既に得し鯨は逃げて月ひとつ
（右三句、遺稿）
突きとめた鯨が眠る峯の月（後篇）

乾鮭

倣素堂

乾鮭や琴に斧うつひゞきあり
から鮭に腰する市の翁かな
からざけや帯刀殿の憂所
佗禪師乾鮭に白頭の吟を彫る
（右四句、句集）
から鮭や判官殿の上り太刀
乾鮭や小野のすゝきも枯れて後
からざけの片荷や小野の炭俵
風呂敷に乾鮭と見しは卒都婆哉
寒山に木を伐つて乾鮭を煮る
（右五句、遺稿）
から鮭や寓もすさめぬ市の中

海鼠

悼文霞

乾鮭の骨にひゞくや後夜の鐘
遺稿、白炭の
（右二句、後篇）
なまこにも鍼こゝろむる書生哉（遺稿）
おもふことといはぬ樣なる海鼠哉（後篇）

杜父魚

杜父魚のえものすくなき翁かな（句集）

植物

大根

大根の畫賛

武者ぶりの髭作りせよ土大根（後篇）

葱

葱買て枯木の中を歸りけり（句集）

一本、歸るかな

葱洗ふ流も近し井手の里（遺稿）

裏町に葱賣る聲や宵の月（後篇）

冬されて韮の羹（あつもの）喰ひけり（遺稿）

一本、腐儒者

蓮

枇杷の花鳥もすさめず日暮れたり（句集）

茶の花

茶の花や白にも黄にもおぼつかな

茶の花や石をめぐりて路を取る

（右二句、句集）

冬牡丹

陶弘景賛

山中の相雪中の牡丹かな（句集）

石蕗

咲くべくも思はであるを石蕗の花（句集）

水仙

水仙や寒き都のこゝかしこ

水仙や美人かうべを痛むらし

水仙や鵙の草莖花咲きぬ

寒菊

（右三句、句集）

古丘

水仙に狐遊ぶや宵月夜（後篇）

寒菊や日の照る村の片ほとり

寒菊やいつゐ盛りの苔かな

（右二句、後篇）

歸り花

木ひとつに飛花落葉や歸り花（遺稿）

屋根葺が不審（ふしん）な顔や歸り花

焚火してひやさぬ庭や歸り花

（右二句、後篇）

冬の梅

冬の梅きのふや散りぬ石の上（句集）

鶯の逢うて戻るや冬の梅（遺稿）

大石力彌の賛

引きよせてとらまへ見るや冬の梅（後篇）

鐵骨といふは梅の枝を寫す畫法なり

寒梅

寒梅や火の迸（ほとばしる）鐵（まがね）より

寒梅を手折る嚮や老が肘

（右二句、句集）

寒梅や梅の花とは見つれども

寒梅や熊野の温泉（でゆ）の長がもと

（右二句、遺稿）

早梅

早梅や御室の里の賣屋敷（句集）

冬至梅

八朔梅彷彿として冬至梅（後篇）

冬木立

冬木立月に隣を忘れけり

二村に質屋一軒冬木立

右二句は夢想に感ぜしなり

この村の人は猿なり冬木立

鶯鶯に美を盡してや冬木立

斧入れて香に驚くや冬木立

（右五句、句集）

みよし野やもろこしかけて冬木立

冬木立家居ゆかしき麓かな

里ふりて江の鳥白し冬木立

乾鮭ものぼる景色や冬木立

（右四句、遺稿）

冬紅葉

人々高尾の山ふみして、一枝の丹楓を贈れり。頃は神無月十日まり老葉霜に堪へず、やがてはら〳〵と打ち散りたる、殊にあはれ深し。

落葉

爐に燒てけぶりを掻る紅葉かな（句集）

待人の足音遠き落葉かな

菊は黄に雨疎かに落葉かな

古寺の藤あさましき落葉かな

往來待て吹田（すいだ）を渡る落葉かな

墮葉を拾ひて紙に換へたるもろこしの貧しき人も、腹中の書には富めるなるべし。されば、やまと歌の繁き言の葉の打ち散りたるをかき集めて捨てざるは、我が俳諧の道なるべし。

もしほ草柿のもとなる落葉さへ

西吹けば東にたまる落葉かな

（右六句、句集）

茶袋を捨る所も落葉かな

屋松葺の落葉を踏むや閨の上

乘物を靜かに据（すゑ）る落葉かな

磨臼のこゝろ落つく落葉かな

一本、春臼の

落葉して遠くなりけり臼の音

（右五句、遺稿）
長生の命をうづむ落葉かな
細道をうづみもやらぬ落葉かな
（右二句、後篇）

木の葉

琵琶の書賛
援音の飲るは壽永の木の葉かな

古葉

ひともじの北へ枯れ臥す古葉かな（遺稿）
千葉どのの假家引けたり枯尾花

枯尾花

狐火の燃えつくばかり枯尾花

枯草

金福寺芭蕉翁墓
我も死して碑に邊せむ枯尾花
（右三句、遺稿）
枯尾花野守が髪にさはりけり
秋去ていく日になりぬ枯尾花
（右二句、遺稿）
柴刈の髪にさはるや枯尾花（後篇）
草枯れて狐の飛脚通りけり（遺稿）
日あたりの草しほらしく枯にけり（後篇）

季題別蕪村俳句全集をはり

昭和十年十一月十日印刷
昭和十年十一月二十日發行
【定價金五十錢】

編者　半田良平

發行者　東京市本郷區眞砂町一五　金兒農夫雄

印刷所　東京市本郷區元町二丁目九　隆文舍印刷所

不許複製

發行所　東京市本郷區眞砂町十五番地
素人社書屋
振替東京一五九九四番

素人社出版好評俳書類

芭蕉俳句全集（半田良平編）・五〇
蕪村俳句全集（同）・五〇
一茶俳句全集（同）・五〇
奥之細道新釋（武田鶯塘著）一・〇〇
野梅俳談（加納野梅著）・八〇
俳句道を行く（飯田蛇笏著）一・八〇
富田木歩全集（新井聲風編）一・五〇

大衆俳句雑誌 俳句世界 一部二十錢 送料五厘 見本入用の方は切手三錢

版元 東京市本郷區眞砂町十五 振替東京一五九九四番 素人社書屋

落